

能世談七部集 之

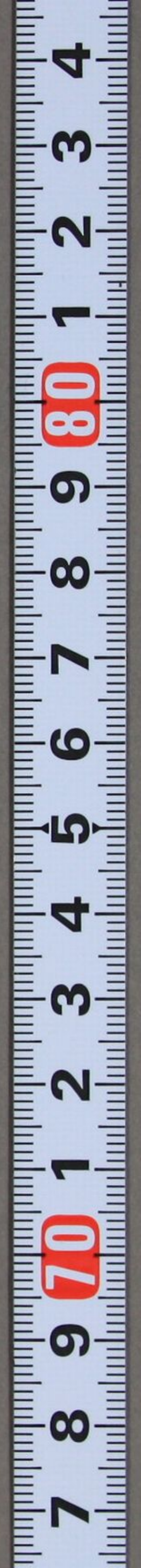
深川
卯辰集
句寔
刀奈美山

中村俊定文庫

文庫 18

980

1



西井氏より仙居の文庫
 に寄つたものあり
 もらつて綴りた
 たり

朱字に西井氏の書あり
 あり也



續七部集序



他書數百卷此たりと云ふは
 七部に稱して正風うろろ
 すすきと云ふなりとのせと
 云ふと云ふなりとのせと
 翁乃連白たれと云ふは
 といふもあやうきありに續七部
 集なる望し玉と云ふなり一毛の

108

俳

三巻二既回

深川集

集六

きすのしといふしはふとふ亀禮
こたう人きまれわなれんころ
ろをきふ人うをれをまう水
しつふふとそ古翁くまみえん
事紙紙人熱きそのたふんし

寛政七乙卯冬

芭蕉堂

園更

序

海川水遊

まろくてもあるまじきものさるる辛子
焼ておろした秋の新うま
昔の月掬のころもわかよめて
ほろろか〜らのせんよた〜る
ねしの腰ハ蹴溜乃咲わ〜る
焙煙の山所を〜る川舟
おひ白れ海かつ〜る小豆粥
ふすまねむて流〜る油
掛を〜るの〜るを掛を〜る
雲々々々みきおろ〜る下かき茶の社

酒堂 嵐蘭 水蕉 堂 蕉 蘭 水 蕉 堂

芭蕉

壬申九月より江戸へ〜り
芭蕉庵より越え〜り
〜り
洛のちりこ

ふ〜り〜り

酒堂

寒徹す山雀の鳴る中、
山鳥散のむ風のかけよ
月乃送又先ふるハ志て中りて
まぢらゆゑ 絶たさしゆゑ
潜まゆのうき世の空れ月歌
那都の清山の雲に遊こさる
弓さしめすうらうらるる
各 町中乃も我ハ赤くさよん
吹えちこす 野うらーつ
草足世世地言 踏まふ秋の
伏見あさり乃 乃 乃 乃 乃

蕉堂 水 蘭 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂

玉の早苗とまげハ懐くや
我ら泣くも 鉦鼓くも
山伏を切つてかけらる 冥の
禮もくハハなまぬよ乃
付合ハ若上戸あそ吞あ
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
系あて和尙はれ又ある
たこ先てあおる乃乃大日
機揚てら田とまき人の
延行乃又鯨さけゆ
不ひたつ池鯉鮒の窟の本
ごは抱こむ土間のへつ

水 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂

茶め弁人ぐら流るる毛足せき
縁子の海らくよまきりあはれ
名

二行アキ

料産の富ま

秋風

激るむる清と十敷の場乃月
志のいほしよのくね 櫛
る取の卸脊ふりしあふそ
船のいよよの提たもこころ
人あつともあつ物あひのふさす
えと意さうあつ物あふそ
ウ 中形のまきもものも流れて
ますくはくらの 斃 一 四
風 筆 宗波 桃隣 石栗 曾良 酒堂

ラ
三
一

蓮の葉あはらいたささ山岸の村あ
地を指さしりゆるあつれ振袖
あふ人天台塔まのらめよて
太刀あささつとれあつるつぼこ
月あまや八川のち報をすはは
藩園の時宜乃あまれ秋の歌
玉子吸教もあつき海う酒
まあつりあつる 細布まきあ
花のまよ小西京疎のあふ年
陽あま 名
能周うさハ甲うぬ鳥此声
叙遊りし後まらるる松の掛あの
風 良 波 隣 兼 風 堂 波 隣 兼 良 堂

ちよよ一結なすくてもうハわれり
 ちの承あひさむさ雪れ編笠
 出かりて葉の湯のあを清ひ合
 島をへつら 吉田 島一待
 るがさきをふ月洗 翳雪
 遠くくものさる 約乃とさひき
 ひやうに中か 梅のたを吹あそ
 山の内さ葉のあも志あゆさふ
 糸の塵かとうさ指あて 擇なる
 下るえれ紅く 顔のかやく
 う 楽する向あめんせれ竹まき
 皆ま〜〜とと〜〜〜傘
 堂 良 菜 風 堂 波 濤 良 菜 風 堂 波 濤 風

フ
に

赤代男や〜と路をたておさだ
 波のり 田植ゆを梅い〜く
 長持の注連ひ〜免うすたの娘
 雲雀雀〜〜〜も〜〜〜
 堂 良 菜 波

二行アキ

二句とあり〜宗鑑うあ
 葉菜一斗〜あみゆ
 下戸あ亭主の仕合
 ちあ〜

酒堂

洗足にあと名の付をきさそ
 瀬鼓双ふ〜むむされ里
 許六

十三
一
り

糸掛の枕灯り——寺下風
 汐さ——星川の橋
 村ハ花田——のまらきこら
 塚の——い乃——もゆる石系
 名 薦僧の師はゆりあふまの末
 今をいひま——今川乃あ
 うつりり後櫓の風と清良—
 又まゆりし四圍ゆり——我
 鈴家ふ清——さる藍の花
 とられ——ゆのあらまの松
 る方を待てる——井々の鶴
 月おとせをあらぬ操か—
 六 堂 蕉 堂 六 堂 蕉 堂 六 堂 蕉 堂 六 堂 蕉 堂

鶴雛階子乃 遊を伴ひあて
 まるきくさうたうたうくさもきッ
 月の宮あものころ小紺衣
 藤原乃さふ典葉のむらさ
 相玉寺牡丹の花れさうりおて
 櫓の蓋とる 遊より行ゆる
 西京乃さう堂にさるまら
 むり——野島住する
 きぬくハまの踊のまらき
 東進乃月あや堂まらき
 青蓮の核は宿をさるの音
 ふらまれ柱杖あてさようく
 六 堂 蕉 堂 六 堂 蕉 堂 六 堂 蕉 堂 六 堂 蕉 堂

一五

筆^{えん}くくま^ま叢乃^たら川^ら表
 山^の蒼^れ々^三 輝^つこ^まま^はし
 秋^の野^馬の^輝く^乃形
 蟻^人の^心一^又月^のぬ^りさ
 大^戸も^あげ^又あ^る 殊^も
 雞^乃た^ます^まれ^救ま^産ま^らへ
 あ^ここ^又橋^さの^あき^むも^是
 孫^さす^ふ田^乃 柳^塚抄^く
 棋^草喜^先く^お大^豆の^汁
 細^うれる^あふ^も志^はる^標れ^お
 鐘^かき^ふく^庭空^一坊^乃 根^こ
 ば^りく^と 穢^落した^る石^のこ^え

支梁 嵐蘭 利合 沔堂 岱水 桐溪 也行 梁 蕉 合 堂 水

火^とば^りて^砧り^てふ^子た^ま
 先^横か^るゆ^りの^物成
 う^らと^とと^とと^と門^の瓦^を雷^落く
 言^ふ歌^まま^うと^と崎^をと^り歌
 今^もと^とと^と單^羽織^をを^まは^まま^ま
 昔^のの^鐘と^り注^もく^こも
 日^ある^あう^う出^る二^月初^日
 神^鏡と^浮智^の地^のと^れそ^めて
 釣^撞も^やく^宮川^のよ^こ
 支^梁亭^口切
 芭^蕉
 口^切の^場の^庭を^なつ^て幾
 蕉 六 堂 蕉 堂 六 蘭 蕉

みるゝ一乃扇れ双ふ川口
 ありつきの端の一一つくは有座
 ちんちんキキくくくく門あ坂
 皮剥ハキの物煮て喰ふ青月
 上毛吹るくちろか流乃響
 谷流くく流りけく竹筏
 ちり指しうり端くくくあま
 拍もも巻静又おろしこ吹
 ちんちんキキくくくく竹の敷
 差さうり御堂の路乃人通り
 妻はと葉程の野ハ綿也

梁合蘭蕉奚竹堂葉梁奚合

酒とと食のぬやまきん
 ぬきれ長乃国を杖立く
 秀又杉まき一腰の袷
 西日入ル花を巻の同まな
 首れ二まよのくくくおのめく
 名
 ぬやちをハ去年れゆ馬
 兜は海くくく軟迦堂のとき
 吹袖くくくくたよりも膝すけり
 ちんちんキキくくく批把のくくく
 凡早くくくくくくくくく
 清げふ注連まくくく社家町
 月盛くくホチ鯛賣花まきまきあくく

蒲堂梁竹奚合堂蕉蘭奚竹堂

一
七

志もろくもつゝ又も道る我ちのゆき
 堂
 ざーいゆの門乃柱よおよせて
 竹
 ちをこもよとを壁に入 ぬ
 蕉
 巻葉よ肩休まするこづら
 鯉
 ろゆゆるくる房列の侍も
 南
 疑つよの谷まきりし出はるの上
 昌房
 場ようことなる 鯉の桶漬
 正秀
 中ゆりあ肉焼くよよゆありし
 撰志
 舞も思ちのよ月待乃意
 游刀
 懐おこほ守洞の中くをさ
 野徑
 とらつてみくく三方の厨斗
 京
 是の法射事い 齋院くらん
 去来

五字

二行

九月廿のあやりの翁又依きり
 ては草の末出竹亭を彷彿て
 卒又十のをふくす毎のたえ
 るをわくして洛の思ふを
 ちよわくしてのあををつく

酒堂

新かのやま田此上の秋乃雲
 蒼行
 善うくるの月や一城かちる厂
 芭蕉
 衣う川林蕉ハるのをどぐりて
 北鯉
 糞草 けしふる道乃 雲乃雨
 嵐南
 古我場月を髭ふ流わくこよ

フハ

澄よまらぬのあぐるまらるあ 全
 暖又折れ物乃り年うよて 野童 全
 池の小隅は芥のふらう音 全
 焼付る蛤葉屋の銘乃月 史邦 全
 風ふるまのつる銜ち破れ戸 全
 老僧の帽ふはきまらる秋の聲 景桃 全
 を報すこゆる保ちまら乃宮 全
 六月多路の二葉よあま川て 素平 全
 たもこ飲子乃少聖淋くふ 全
 擦をりた縁よさけこる操の総 全
 けあるまらるをとりるまの目 全
 枝ゆるたふ階よまらさくけて 車庸 全

九

二たり並て家のあまらる 全
 うつられた加賀の落本ちりさうく 探志 全
 女まらくこゆくあ庵の禪 游刀 全
 襖入まぬ山公事やまらるの春 正秀 全
 ち草の芽のりゆる赤土 卧高 全
 里裏のすぶこ起せはまらるの冬 野徑 全
 うすむ夕那の嵐とる大 昌房 全

杉の中

曲翠

後の望やむ池乃らあ葉うら 全
 おほろの月此桂つらうく 酒堂 全
 秋の筆真子先二あらあく孤生まらる 全

赤いよすりりこなるその儘を
 晴くぬきぬき向の船乃天をみお
 舖ふこの船をみるる波付
 涼舟をみるるこころに下屋を
 伏見のうきを喰ひ喰ひ又さく
 磯の利を志免て百りたのこ
 母をむきさくころころをあつる
 事え又田の荒はるる波あつる
 嵐の兒をぬきさく二日月
 花吸と鳴鶴のひよくと
 空より衣をはきむ風を
 俺さ甲斐の女をのふ妻縁

翠
 堂
 翠
 堂
 翠
 堂
 翠
 堂

志とくろよよまて志まき 雜
 類南をさうりして月をさう縁
 悪七を清りけりさよけ 秋
 世の中をみるるむすまふ
 十はくくくくくくくくく 類の形
 通天のふ葉を地より神は
 花一切一切大根の湯煮
 追おろけ大いふのよま森
 山を登るのめり 折 新
 菊やうしてさう流くとさう
 意もがさういふ又城下乃月
 まうさうぬくちより茶師押合て

翠
 堂
 翠
 堂
 翠
 堂
 翠
 堂

ところらてんかごころをしま
 竹の皮
 何をもんくし行く子なる
 宿宵の夢をともくする
 かくして下くぬれ縮の下
 還るのゆをあらうれては
 門はまき流ふたそくれの
 夢の心夢えくくる
 塙うするちうたふれ
 聖 全 堂 全 聖 全 堂 全 聖

三行

忘年書懷

素堂亭

芭蕉

芭蕉とて蕉のわくわく

芭蕉

餅春

餅つよやあぐまうくる

嵐南

衣配

衣配のえん揃

曾良

佛名

佛名や強は次を香の

酒堂

歳昏

72 俳 圓信二天

第五

去乃言草ハこー此きー根の林下鶴生の里乃共常子
高林よ染しむあまるとか川交を拾ひもて或人より味く
せん事をおりひーかこすの秋のけしー先のーをを
受り形ぬ流し一はーのそのあり立蒼氏山枝を油
かこし様志を粟乃急め致もらんりれこ流しせしむ
しあ川流るゑ流るこ乃山の岩ありしり卯辰集とハ
しん形家海

桑門 句空書

二年

新集

版才一れ及古くせん年のくられ 素堂
餘魚
ゆーすすき益又桃のた書 油堂
勝りーのせらるる琵琶れー 素堂
宮の月とくあふるあふ花ーて 芭蕉

卯辰集卷第一

春

ニリアキ

日乃まきとらとふ鶴此歩之哉
けきのまきと李白酒此よふあり

其角
秋風

あふ里ふまをむく

まきとや山あふり入事袖乃敷
東君まきと月の恥ゆくたひま

楚常
秋坊

病ふあ

あふり一のまきとあふり今哉

真室

湖水乃にけくふまきを述べて

之半

7の俳

十三日

藤とまきと誰人いふ花此ま
え日ま後と裁ゆく石破の関
くまきとまきとあふり海乃ま
曙此あふりまきとあふり海乃ま

公羽
小春
牧童
七尾
勤文

江戸

山まきとまきとあふりまきとあふり
四日まきとまきとあふりまきとあふり
乃まきとあふりまきとあふり酒債此
正月やあふりまきとあふり酒債此

漢川
北枝
牧童
万子

裁中のまきとあふり神

まきのまきとあふり

卯杖まきとあふり徳林の切ふらん

句空

多きもおも君を忘れぬ昔は
 多敷を抱くまことこの川草系
 藪の中をなす人ありぬや
 くれ落がさくさく摘ふはれのみ
 ち〜言れ美葉をやして消ふりり
 七種のさくさき揃〜雪かきこれ
 十錢を好く芥雪乃降るまき
 妻のたえまが所風ゆ〜く雪北上
 雪消〜あ〜あ〜出〜日塚
 残雪をさ〜雪と息乃湯氣也
 のこぬ雪下野あまふあく海流

紅糸 牧童 女けん 英之 大津尼 智月 四聯 小春 山枝 尼 智月 知 芥若 馨風

多〜け〜く〜餅〜多〜酒乃よ〜の那
 ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜
 お〜し〜し〜は〜と〜岩〜あ〜ま〜ま〜
 多〜〜と〜帰〜る〜ま〜野〜の〜風〜く〜り〜り
 白〜〜〜梅〜は〜く〜里〜北〜半〜乃〜角
 蝶〜ま〜ふ〜あ〜ふ〜あ〜 梅のま〜下〜これ
 手〜鼻〜う〜む〜ま〜ま〜 梅若白ひ哉
 海の中〜
 妻〜あ〜ら〜小〜時〜〜の〜梅〜お〜山〜乃〜ひ〜ふ
 酒魚
 多〜〜ま〜ま〜と〜行〜〜ハ〜お〜れ〜〜梅の花
 多〜多〜ら〜り〜ハ〜半〜乃〜上〜の〜梅〜れ〜こ〜ま

唐余 宗鑑 秋坊 白空 岫曲 若 李東 秋坊 万子

はるかきしむのみはるかきしむの
くんの梅勝とりたる梅の
雪やうい毛ーなきく雨あり
うくひとのうめいそふあ
塩さうひちらう奥のかさる風情あり
白魚や海ふきし一本をにこり水
塩河鮫やうめも塩のなうぬ村
種ものや池ふきしとてまれ
いこつふ柿接ぐきる彼岸式
雲おくおひのこのころ木の間
白松らうや岩根のうづも見
雪しらく柳やうめく梅み

三
聖水
胡及
曾良
山枝
宇白
梅宗
越人
楚常
普人
本東
兼煙
致益

蝶乃羽ふかしからうく柳の
本はさひくまらこれらあ柳式
涅槃像人たまのりる阿羅
かきしむハ勝てれまう祇園式
山蛇乃あれはあ花表の那
雪蕨よりうづり体ふ味の
うつむいそひ草あむそり
あつむいそひ草あむそり
梅のうみそはうやむむしり
うめあふ梅あふうまへん草
かけこつうめあふうまへん草

藤守
其常
遅櫻
本東
凡喬
翁
司空
元之
秋坊
南甫
其糟

鳴雉子やみくりのひさ小春
 火屋即ち河鳴雉子
 至縁より雉子鳴ゆく
 さし〜鳴く流るるを伐し響音のれ
 橋桁や日ハき〜あ〜夕
 砂さらや嵐ゆきわたり岸乃浪
 去川〜や穢ハ月の香のやうに
 穢月羽こく馬も 穢 森哉
 穢の家北菊植分む 穢
 陽をを又〜るやその〜る〜る
 かけう〜やう 穢月北〜る〜る
 系〜れ〜梢ハき〜根をり 穢

梅露
 小松 芥ト
 四睡
 菰岸
 山枝
 荻凡
 漢川
 自喜
 春幾
 蕉下
 楚常
 中 柳葉

粟う詩の漢あ〜
 君い〜る〜あ〜る〜や〜は〜と〜み七中
 既院信〜ら〜ゆ〜く〜る〜る〜去筆哉
 其の野は枝も 神もは〜る〜
 七〜る〜ふ〜あ〜る〜さ〜り〜や 教
 ん〜ほ〜る〜や 芥生小系れま〜る〜道
 草もえ〜る〜お〜乃〜ほ〜ら〜は〜く〜せ〜流〜
 ら〜この芽れ〜る〜る〜て〜と〜と〜
 あ〜川〜う〜〜ま〜人〜乃〜な〜川〜ん〜猫〜の〜ま
 子とよ〜る〜る〜る〜ぬ〜猫〜乃〜ま〜
 曙やふ〜る〜る〜 柗苑北詩の芭

牧笛
 李東
 須之
 和乎
 何處
 牧童
 不的
 和之
 女
 尼 知月
 其角

妙川のふきききやまの柳乃家
むらさきのあつとせき道のよき
る津くりにけをぬく本蓮花

秋之坊より

遍昭乃養ふもこゝまれ西
まるとや淋しきやうな柳柳
こゝまるといふもあつとせきの
こゝまるといふもあつとせきの
海と鳴り暁色乃江を蛙
鳴物とみふななく小田ねかしの
うら返し一癖とせぬ宵戸の蛙
笹のあつとせきやあつとせきなく蛙

雨邑 破瓶 音露

牧童

渙川

雨邑

宇白

一笑

孤舟

字洛

流志

あまのいふ柳とあつとせき
あつとせき穴あつとせき蛙の柳
蛙子のあつとせきあつとせき
ま柳とあつとせきあつとせき
川舟のあつとせきあつとせき
あつとせきあつとせきあつとせき
海棠はあつとせきあつとせき
あつとせきあつとせきあつとせき
あつとせきあつとせきあつとせき
あつとせきあつとせきあつとせき
あつとせきあつとせきあつとせき

其糟 白空 一草 普人 燕子 紅糸 雨邑 孤舟 北枝

上三子

たきしるき燈や月れうこさ垣
かられあや食喰うくし摘みおま
里乃昼草の花源一鶯のむす
まれあや幾野かや朝日新
草のむす蛇あけのや影月
草庵をさすくひく

春幾 渙川 孤舟 素洗 淳葉 柳川
其糟 捨葉 全 牧童 本東

四方りり花吹入く鳴け海
湖や心くくくくく吹力乃茶
元禄三乃くく此大老ふ
庭の構も幾も草をさす
焼よりりされも花ありのと
判官をわりのふ
かいせん、まきくく人花の安宅式
海士くあ破もさ乃茶れたりて式
らぬ花を澤解蟹かつく岩間く
机乃よりり石小眠く人茶乃山
村魚やあ流ぬれぬ花流下
あれハ扱ゆけくくくくのや海

翁 北枝 全
世常 字路 元之 路通 梅露 春之

俳句の巻
胸

何人ぞもやゆひ掃ふ花の寺
 花咲く程いづれしき二王うね
 提灯ふらふかみと花又哉
 醉即ち酒手小花を二日つる
 瀬やらしぬふぶき一壺川
 滑のまくりぬしめくはれ録式
 子折くくく花ふかき油長
 花もつくと止長日かき基歩式
 まことかき園六花乃あうり
 朝あく花をま乃まき食哉

草庵

おろし流や海ふむくと山様
 句空

錫杖と心けく〜れやまこく〜
 夕風やあつことを垂くらるはみ
 か〜ゆ〜く様ゆ〜て〜つ〜き
 根あ〜〜や様ゆ〜て〜つ〜き
 む〜るの羽織てより山様
 山さ〜〜〜えかみ時日此西〜
 旅り

凡流の玉をある〜ん山さ〜
 とふかく〜ゆ〜こ〜く〜ま〜れ様式
 水も乃袖り分やく様ゆ〜
 岩根ゆ〜ひ〜ゆ〜く〜や山さ〜

蓮様 三秋 柳絮 小松 斧ト 拾葉 可友 古延 一傘 殊坊 草離

同 不中 柳江 桃英 紅介 李東 北枝 同 浪化 万子

秋之場を母退悼

ぬ乃と〜き子を置らるる也 姥様 牧童
 其の首かくと寺ハ自體のさ〜式 春幾
 山吹や〜をむく岸乃毎〜也 路舟
 昔ある花を皆やま〜川白紙 巻凡
 山ふ〜やあ〜も〜ら〜く滝の家 世常
 也よ吹〜于け〜る〜子傑〜ぬ 林陰
 蚕かひ〜る人ハ古代のま〜〜の神 曾夏
 銭別
 や〜ふ〜只鳥の葉〜川ワ〜れ哉 世常
 柿の花 機乃ら〜〜を中〜ふ 京
 初遊〜ま〜川〜〜 可廻

三

8 俳

空大至乃花は初遊北道も如〜 句空

西大寺〜

あ〜と〜着〜ま〜の柳と〜ぬま〜 同
家流〜や〜包〜〜る〜魚〜 一 友の心 四職

い〜は〜く〜ゆ〜ま〜溜〜〜〜

巖〜海〜と〜れぬ是と〜ま〜乃流 同
け〜は〜よ〜罪〜流〜く〜終身の日々〜ぬ〜 乙列

孤尔、我美〜ゆ〜く時

ゆ〜は〜は〜〜に〜留〜ま〜る〜く〜水〜と〜日〜と〜に〜あ 山校

秋〜ゆ〜あ〜

空ひ〜〜川〜あ〜〜〜 暮〜家〜ま〜日〜哉 李東
初〜ま〜や〜巖〜あ〜〜〜ま〜〜〜〜〜の〜乃〜ま 尾張 野水

四行

4 夏 二行

ふりく此里とんおろして

夜うせーや綿不は公姑家
去もまの節もあー一更衣
更科一り多ーいふにまき
振舞の中ふまよりあーま

取もまの節もあーい

侍ーころり

息見えぬ尼もまーやけーま

句空

句空

秋坊

建風

長皿

十三行

橋やい波の野中乃郭一云
附も海ーくはーくまーい
糸まのハがーこまーりり佛生ま
屋とーれて鬼よまーま
牡丹らりま昔茶室ーく且ー
一編乃ほーんやらーく
何事ーまほーんまーい
麦の穂や昔茶室ー里の背戸
四膳く武府まゆくあり
牡丹散くまもふーく
ちる事ハ信ーまぬ牡丹式

翁

牧童

玉斧

古庭

桃葉

其糟

南南

自笑

北枝

牧童

子ーたられまー人まー

先教や推乃本もあり其本立
 少く水や裏屋葺き唯交こそら
 雨もこの下よ志をこも葺りうね
 心も川屋ハ持もまぬ世乃為ら此
 うらけももあふふぬふ一相のむ
 初もくくく人海もなくも難ん
 まるも刈うも戸扣く水鷗かも
 淋一か家人とよるやのんこも
 浮きまふまふおくも折交れ月
 廿日くくやこくやと其の舟
 みくく夜や百合咲かけてゆきり

志の小まらこころの石のみちゆく

為 抄業 違風 水橋 幽 幾葉 伯之 因木 孤舟 乙列 莖常 林蔭

十三

知本祖 似る心子乃なく眼元
 うれまをききと折来しも志まひり
 まるのなすくや福むきる 杜若
 かまはくこ志くうくう一古江式
 八橋をうけぬ流ちんく
 橋あふ流くくく一あんかきんく
 尼く草洞中やそきく河茨子此茶
 竹の子を山く音響く小寺うね
 小麦田うく鳴や狐の書とたふみ
 妻秋ハ身此並くこらふりり
 みるの川くくくくく

産まき川くく

莖常 秋之坊 致昼 不中 唐介 草薙 凄茂 疎杏 京 凡喬

ふくしまれよありて佳葉の
 人のあまくとむらこのさ
 さるくさとと里ひとも
 ねもひくけ谷よりまらり
 石の道のりもはなれ
 香らばささるあそび
 汎雅の昔よかりけり
 早苗はささりけり志のふ
 交科山もささりて
 さあつてまらり谷乃さ
 さみとれやあつてさ
 津出〜目もささり五月雨

義

紅糸

雲口

三秋

中ぬ美ふれつとささり
 の路もささりまらり
 こらへつとささり
 う〜日もささり
 せさつとささり
 さみとれや軒はささり
 佐の路通かりひさ
 さみとれやり食らり
 五月雨やりささり
 小西〜田貝ゆり

義

字路

尾張 荷今

高岡 滴水

市菘 負喜

李東 李東
 且張 且張
 邑姿 邑姿
 三岡 三岡
 楚常 楚常
 井關 井關
 伯之 伯之
 女 女
 秋城 秋城
 雨邑 雨邑
 京加生 京加生

蕁菜の石け人めくもあられ也 万子
 初仕庵の夕を尋く じ列
 水汲み跡やさやれわ〜るり糸 雨枝
 さゆ〜さゆ〜一尺き〜〜ゆ〜堂 唐介
 淡は海や花うり花うりて花堂 鐘昏小松
 堂方ふさひはく魚や水の音 蘭子
 乃けふ〜うりゆ〜いさき〜り〜も 春幾
 折う〜〜ゆ〜不遠きわ〜る〜るゆ 一洞
 あふま〜〜油〜りふら〜堂〜ゆ 淵之
 ふ〜〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 万子
 妹背山ね〜〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 行山
 流〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

三

まのこころを待たしむるに
 山の井小蚊の鳴い流る夕哉
 かりぬるの庵にあまの光の
 かこころををぬるとるん故に
 蚊小覚て馬屋乃言もよ
 ぼらくしとよれ言まきく故
 亦排ふ扇より流る故なり
 病中

花もふ死なれりて
 東雨や再世とて
 栗小まにのこまぬ
 梢とて海ゆく蟬乃今
 何處
 高岡市巷
 秋常
 好
 李東
 菅沼

むさし野ハ蟬れ鳴
 空蟬や石の前表を
 ありてや撥もそ
 無常迅速

形く志ぬりしきも
 せしれ鳴中小起
 蟬乃総カそそ
 向空

少人乃あふ
 心も雑乃奇かく
 うけくし人よか
 孤舟

四条河原涼
 川せや扇枝
 扇

三

川くさるあゝ海刺あふ涼く式
あま息よふ外涼く神まら
とくくゆくゆく森の田中式
猶涼く松ふき人の居るかろり
涼くさや下馬より末の小松く

秋の場乃新脚よ

こく熱く弟をもくく物も
よら身のものおもはぬ涼く哉
於舟よきくふとくはるるとく又式
初涼く小川を涼くや奥の新
川涼くぬもらへく記を物まら
とくくふ横積扇あら川柳

其幸

同

句空

四膳

雨屋

李東

何處

其權

葉子

王芥

乙刈

六月ハ涼むくくそ秋乃初子
白雨や猫の尾をくむ筆具子楳
ゆあさちのうきふ涼くらん式
夕暮やうけあひまをく中世家

亭中ふや付

くくくく履を洗ふ清水く如
暑やうけむは涼の中酒人
あふ只口甘く舌まらく川系
松伐て古木の清水れまうい哉
あふ祝く川かり出くは涼式
あふや近江くあうく川の敷
あふく見やれくあふる滝れ水

遙里

小春

柳宴

京
去来

小枝

一泉

古庭

英之

一男

乙列

岸
自笑

上三十一

森くさしを煙あはれとて松の影
誰かあそびた斬あしんこく麻
りぬけくあ路しや様あこ
一笑



痛らうく山里よゆら
とのく鮎あせしぬら

麻くさしを煙あはれとて松の影
誰かあそびた斬あしんこく麻
りぬけくあ路しや様あこ
一笑

君の意

楚帝 在幾 牧童 遠里 白函 僧 光山

ゆふくやあつる魚まかあるる
夕鳥のさけしも道きまう柳
ゆさうらふ路やりの細き経折
ゆふくやあつる魚まかあるる
虫かくり残るまはさやあし

万子 幽子 唐叢 小枝 自笑

四行

秋 二 下 十

我中ふく

早稲の香や分入右ハ有るは
君う代ハかくもるもぬれ梅も式
河骨よりふ白ひや子梅の花
夕草もやうきまのひて入るも
晴蛉のまきちふりぬ梅の花
夫のふ時民乃拵並く田面式
外一介とまきや早稲乃時

霜
一笑
牧童
松鶴
遠里
李康
自室

十二 下 十

其常をまうり

ある秋を好る梅を袖に添
古畑やあまの麻濃とふ
印の寝
七よを笑うく藤入梅居る
明なれ星うかきる給式
雨夜
銀河のさほらりてり海をく
初も早やうりこころをこれ秋の波
旅者むおふ

小枝
李甫
牧童
雨色
宇路
句空
其常

常陸守

十三字

松明 附

草花 李東

声心くま 魂ま 盛弘

くま坂さうし

熊坂くま 五羽

玉系たの 雨柳

楚幸 遊言

月落く 魂あ 牧童

あつれく 子此暮

秋風く 幸都 五

高枕筆 松の 長皿

七月 既望

高枕筆 志く 小枝

志く 日ま 二羽

行雪の うけ 魚素

稻妻ふる 洞梨

いふ 船中 幽子

いふ 志く 素洗

梅く 孤白

霧く 凄茂

青園や 其角

89

公難の花の鈴まうり〜ハナ〜
〜れ〜も産の〜

うらた方のほつふ志あゝらあ
毎〜ね〜只船ま〜ふあふあ

舞一公表をおくりて

あ〜あまき〜あ〜あ〜あ
古津〜あ〜あ〜あ〜あ

つ〜つ〜あは〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
雨〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

白空

望亭

水枝

由是

尾張 且葉

結末 何之

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
小〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
山〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
面〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
昔〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
舞〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
始〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

慈野へま〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

日下 盧水

秋坊

盛弘

春幾

小枝

牧童

其籍 閨文

一凡

遠里

乙列

徳カ下
しのびを
諸えり
思ひ
あり

川喜やむくけ咲かハまゝ起き
村もや萩の根ふあ萩蜂の色
夕露ふ垂るやせ萩れ 糸
萩ふや萩の子泣ふととれ水
萩えはゆゆけと世野の糸式
ととふふくまはねとれ萩式
猫端やふあ引こほと萩の枝
と氣多の萩よまて

小枝
冷袖
楚孝
牧童
忍市
雨邑
小枝
英之
四膳
日
乙列

十一
月

月

きと娘湯よふ入

中へはまふとたふや岩れ
娘乃退音
くひとのや大さく女郎花
秋の野ふ花やう実やう急のこま
野田のふとと休ひ
あつ
玉明も娘屋はう草やあひける
つくりぬ里れ木槿乃小むひ
咲ほきもありまはむくけ垣
い流のるふ背ふれ木槿咲ぬ人
芳ふくま且後月橋を渡りて

秋之坊
素流
楚孝
小枝
四膳
楚孝
不中
如柳

秋葉に何の由りそ思ふに據 一乃子
多くはよらそけく秋の小てふ此 牧童

十一
は
川

多田此神社ふまきく
あまを伴の秋書
美堂うらうらひりてと

あねむらん甲此下のまらりて 前
歳秋う甲ふまきくぬ秋書のお 多良
くまらり乃うらうらや秋の風 山枝
色ささるの歩もさあし月夜は 乙列
かまらりた櫓の糸や月の隅 世幸
月とれかけらうらうらてとてり 北枝

お返やれのく月此おひい入 邑姿
くまらり月夜はさく丸末橋 九里
青天の枝りうけり月夜は 長皿
月の夜や道いそかき人あて 漢川
船舟も月も遠屋もゆかり 順之

山中此漫泉ゆく

子を抱て湯の月乃せくちり此 山枝
隈もかく名もあき原の月又此 意情
鑰もあき庵此家月又この那 河梨
月も田面海もさるる夜は此 秋之坊
權よく休まる舟此月又此 如柳
座敷もさる舟さして月とて 浮葉

月又もつるさやふらほくーき色かたー
 月と舟櫓繩きれくる笑ひ成
 雨邑
 唐介
 万子
 清流
 路通
 起もせと寐もせぬ雨の落る地
 民屋
 盛弘
 三圃
 牧童
 日

十三字
 好く路のさよふ葉は曇る儚うふ
 柳真
 句空
 玉斧
 幾葉
 是非も乃命とあやの赤毛蓼
 岫曲
 山色清浄心
 紅介
 蓮の葉はさても拾ふ苗々那
 乙列

次子多川ハ曉晴ト云々
丁落々 芦津町 此中
吹叶々々 麻子 泣く山
起あう 墓の後 泣く山
まう 男々 夫と 泣く山

栗柄 泣く山

越中 小 越中 あり 泣く山
侍 育の あり 泣く山
眠 子 泣く 泣く山
あ 子 泣く 泣く山
泣 子 泣く 泣く山
泣 子 泣く 泣く山

亀洞 遙里 句空 孤舟 草籬

四睡 川柳 七里 孤舟 万色

焼心と あり 泣く山
積も あり 泣く山
ま あり 泣く山

草庵 あり 泣く山

持 あり 泣く山

泣く山

あ あり 泣く山
泣 あり 泣く山

十三子

泣 あり 泣く山

漁川 桂岸

柳宴

雪水 句空

このまゝ一編引ハキカシなれ

山崎ト 山崎ト 山崎ト 山崎ト

ト付家

初もこれりもあそび山女不白

市人の多ふもあつた鳥 凡

あそびやあそびあそびあそび

あそびやあそびあそびあそび

あそび

秋をや息あそびく野人也

あそびあそびあそびあそび

妹淋一ニ台

翁
少枝

持本
李雨

推雲
南甫

如柳

北枝
四睡

秋や秋の一日もあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

山中十景高瀬渾火

あそびあそびあそびあそび

有省

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

あそびあそびあそびあそび

紅糸
牧童

意情

聖孝

翁

僧
光山

雲口

和角

徳子

四
川
P
P

機り多分の持りてぬと云なり
秋は海能乃尾の志とらきり
人ハ信て取とらとらとらとら
あさささささささささささ
仍秋乃ささささささささ

何處 小松 孤衾 我輩 星張 昌碧 越人

あゝ凡や花あささささささ
かろりりれあふつとつとつと
蓬生ふ持あせりり葉ととと
小あさささささささささ
あゝさささささささささ
鯉とんとととととととと
山川ふいりりりりりりり
心あつとととととととと
新馬はあささささささ
つぬ足乃法のととととと
二葉あさささささささ
目ふささささささささ

園木 蘆水 遅桜 牧童 椽青 如折 秋話 李東 何之 雨柏 椽青

卯辰集卷第四

冬 二行下中

をささるくぬさる花の實子楳
草籬 楚帝

路通の杉栂を送る

えぞのこゝ旅人多く石部山
大津尾 楚帝

さむく夜の雨さむくさむく
甚子 楚帝

の凡やあはらくつらく細代梳
何之

淋しき庵のさむく三句

山あらしさむくさむくさむく
秋坊

煙乃隅ふや耐の神といもきん
月

ホウ〜〜や咲結ゆ〜〜十足
楚帝

風ふ〜〜の〜〜り馬上の那
春幾

ホウ〜〜や〜〜動く櫓の音
雨邑

鈴籠く〜〜音風と〜〜り
梅彦

本枝よ〜〜く〜〜る八あう
林彦

身ま〜〜る〜〜る

庭の〜〜る〜〜る

神のあやぬ〜〜あ〜〜し〜〜り
湊川

伊賀の海家山中あ〜

物〜〜る〜〜格も小笠原を〜〜色
翁

鳥の〜〜格一〜〜よ〜〜る〜〜り
幽子

97

乱山小月影ある河り夕附る
 志うれり形くその候まてふし
 古城系れしれ信なき巷の那
 あり編く日あくお附るよあ
 志くまきし時あひ夜のしれか
 徳利さけく綾のふくしお附るか
 垣あれく道のしるる志うれか
 小かくしり出さしき世
 志うれしき世く附るしくハ
 十月はぬさハしるる志うれか
 志うれしき世く附るしくハ
 宗因

紅介

牧童

小芥 芥子

白空

梅彦

四睡

洞梨

山枝

同

宗因

豊中略有七千首
 不負百年風月身

志うれしき世く附るしくハ
 志うれしき世く附るしくハ
 志うれしき世く附るしくハ
 牧童
 四睡

宗紙十三回忌

地こくハハるぬ本のまふれ夕うれ
 這物く落る系に杯すれ蛙うあ
 志うれしき世く附るしくハ
 志うれしき世く附るしくハ
 志うれしき世く附るしくハ
 宗鑑
 跡查
 白空

十三字一り

庵乃...

けくさ... 孤... 柳... 牧童... 其... 孤... 北... 蕉... 雨...

十月ノ望

山... 種... 曙... 辛... 孤... 秘...

李東 幾葉 我輩 日 朱花 万子 字路 孤白 康樂 雨鹿 牧童 我輩

十二字
行

しんせきやわらわらあはくはあはくは
神楽のわらわらあはくはあはくは
三思 山枝

老人とまきまきりて居る

あはくはあはくはあはくはあはくは
李東

元日のおや 雪乃 朝茶の湯
孤舟

舟さし 柳乃 雪を歩かぬ
其糟

世田のあはくはあはくはあはくは

あはくはあはくはあはくはあはくは

あはくはあはくはあはくはあはくは

あはくはあはくは

あはくはあはくはあはくはあはくは
山枝

あはくはあはくはあはくはあはくは
社

寒山讃

痛る思ふ門乃 ちとくくくくくくく
其角

あはくはあはくはあはくはあはくは
小松 斧ト 牧童

あはくはあはくはあはくはあはくは
山枝

あはくはあはくはあはくはあはくは
乙列

あはくはあはくはあはくはあはくは
草堂

あはくはあはくはあはくはあはくは
盧水

月

あはくはあはくはあはくはあはくは

あはくはあはくはあはくはあはくは
荷今

あはくはあはくはあはくはあはくは
万子

大さや難波城にの鴨のたより
いと似人よ年舟海屋のうぐさる
静る海をくはくせふみ葉をさす
牧童 其角

三行

三子

元禄二の秋海とねくろ
山中温島ふちふ三友吟

るつりく燕遊行まうれうね
花舟みよとどくし乃曲め
月くく相撲ふ徳踏ぬくく
鞘くくくくくくくくくく
あま樹ふ藤のまほ水乃さ
小枝 曾良 菖 小枝 苔

紫切りよくは家事か毎々
叢澤丸忠山ハ菱乃寺
花女四女人田舎りくく
あまふふふふふふふふ
髪をくくく福く更くりぬく
甚乃ふくくくも中くく罷ふく
先祖乃ふふふくくくく
有明の糸乃よとせかこく
あま川拂ふ輝のうけ
秋月よあいにぬふも浸り
白さたきくめ續く葉は
花のききき古き都の町は
小枝 小枝 小枝 小枝 小枝 小枝 小枝 小枝

| | | |
|--------|------|--------|
| 去と残ちれそ | 仍たふれ | 鳥 |
| 長あそびや | 去りゆく | 静波の貝ノド |
| 銀乃小結 | い | 出ると芥焼 |
| 多ねふ | 去り | 縁のわらうり |
| うはく | い | かぬしのせく |
| つと | 少袖 | 昔 |
| 能義人 | たふ | ぬ |
| 晴 | う | い |
| あ | ま | れ |
| 初 | あ | ら |
| 小 | 知 | も |
| 癒 | 癒 | 癒 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 石 | 世 | 花 | 浪 | 日 | 枝 | 日 | 枝 | 日 | 枝 |
| 至 | 晴 | く | り | り | 枇 | 杷 | は | は | は |
| 細 | 昔 | を | 仙 | 女 | の | 姿 | た | ま | や |
| あ | ら | ぬ | を | 志 | ほ | る | 水 | の | い |
| 仲 | 細 | う | 宇 | 治 | の | 細 | 代 | と | 赤 |
| 古 | く | 一 | 使 | を | ま | る | 口 | 上 | 日 |
| 鐘 | は | り | く | 花 | 乃 | ら | り | め | る |
| 醉 | 狂 | 人 | と | 孤 | 生 | 昔 | 昔 | 昔 | 昔 |

三
リ
ナ

小畑近
井
く
い
し
の
り
ん
ん
ん
ん

| | | |
|--------|------|--------|
| 去と残ちれそ | 仍たふれ | 鳥 |
| 長あそびや | 去りゆく | 静波の貝ノド |
| 銀乃小結 | い | 出ると芥焼 |
| 多ねふ | 去り | 縁のわらうり |
| うはく | い | かぬしのせく |
| つと | 少袖 | 昔 |
| 能義人 | たふ | ぬ |
| 晴 | う | い |
| あ | ま | れ |
| 初 | あ | ら |
| 小 | 知 | も |
| 癒 | 癒 | 癒 |

言らばはりけりしきぬ物賞
 縁乃垢ほりきりしきぬ世はか
 のほりけりしきぬ乃登ぬ
 水雲の島の子とゆかり
 式部うまははは川第少
 月花あま男なうと海にへき
 ほりけりしきぬ此蛤刺
 厚厚な体あを清あまや人
 名々の二階の裏きみふ山
 いつの日う障子よ張し人歩
 額をぬる角入してと架
 糸の茅料まうひし夕らま

童列枝 童列枝 童列枝 童列枝 童列枝 童列枝 童列枝 童列枝

柿食三吟
 八穀や脾胃は臆はま枝喰ひ
 毎くくくくくくくくくくく
 けくくくくくくくくくくく
 嬉の母を怒るおまはかた
 頃のと取とりしきぬわく
 唐をけりく人の顔とあらく
 標陰るは焼鉄ぬまうを
 盆は李を置こけりしき架
 入清簾すし流房のし歌人
 ーしきぬまうくくくくく
 ち流くくくくくくくくくく

乙列
 枝列童 枝列童 枝列童 枝列童 枝列童 枝列童 枝列童

かしあふ月の雪ふかほりん
 紀多くあえふ。衣たよよふ
 けししししあしを鯉口
 友妻くハあふ。あふくはあき枝
 小舟のありけ。西化寮
 さ名ともそれぬ。釣籠草外く
 以體よりを流乃。ゆりる
 怨哭此服。後及んむくー本
 海も流き。お里の新葵
 いさうのくぬ。れり。産之。後つと
 各さる日。もいつ。風をふ
 花乃香の太。素道も。押移り
 童 列 童 枝 列 童 枝 列 童 枝 列 童

うゝのきあうぬ小鳥堂 枝

三行の年

玳瑁五吟
 風やいほとせ。ねも。玳瑁の海
 西もむろし。も。ま。り。乙列
 乃妻此。旅の。牝馬。追かき。小春
 足乃。負の。い。く。ま。ま。い。魚素
 さう。ゆ。ま。の。湯。乃。漏。か。ぬ。る。月。霜。北枝

簪の栞とらえてくもりをく
 陣小屋の秋は余波をいさめおぼ
 あななふ家なきふやふ物 ち
 坊ぬ神小あそびを運ひくを
 池れとて何人乃甲のうきさり
 指さる徳本れ切しきうれ後よ射
 ちを森せぬ日のくせのむら後
 びく落おほふ薄の味あそび
 草の寝るまはゆるる 翠 契乃棚
 布使ふも袂似し人の踊出
 伏見れ月乃むらしめささり
 花さるるる物をえつめく後く
 列 童 春 素 枝 素 表 表 列 素 枝 素 春 列 童

人の思ひくく角おとくく 素
 まは日ふ用帳しとれか自佛
 笑くしとてぬらぬ 節うら
 馬 遊 額ふ成まうくやうき
 越の毛坊々情乃こハけ
 月のあふ痛々後とハ押え
 ぬく 雪さきけおのりく
 簀戸れ番鳥帽子さふくく
 ゆるさぬそのの 妹々 夜 寮
 うけくしき枝と蠅のさけん
 食寺こ何安郭 くのれ
 碎狂ハ坂本領乃 頭 分
 素 表 列 素 枝 素 春 列 童 枝 素 表 表 列 素 枝 素 春 列 童

枝 折ふさありは辛味の葉を
 枝 袖——くまき居てなうあはれあり
 枝 吹く通を——
 枝 臨終去るぬ亭ををれきて
 枝 業を割るふ春の片隅
 枝 くらむもま杜る美小別荘の
 枝 山くありの月乃く

三

霜六吟

人の心乃く家の海をなまふり
 山 枝 波のよこせぬ海純ハ味あり
 江 余 雪宿は望もまもまこ
 渙 川 本滅はくまこまこまこ
 牧 童 あこの月ハ身ふかけまこまこ
 李 東 秋乃夕を影あまこまこ
 筆 幾度も小細福をりまこまこ
 臈 原乃るまこまこまこ
 枝 山科は清ふかまこまこ
 余 ま川あけ物まこまこ
 川 各風を流の先のまこまこ

四

童 井 糸 海 し き け こ り き
附 く 八 月 一 日 一 日 終 幕 中
お 撲 ち と け と 祖 宣 乃 ぬ る さ と
け つ こ と 秋 の 空 ぬ る 赤 と 人 不
と け み も ぬ け こ も の お り 少 け
花 乃 一 日 一 日 乃 一 日 一 日 一 日
こ 事 乃 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日
照 乃 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日
鼻 子 乃 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日
山 乃 乃 鞋 乃 一 日 一 日 一 日 一 日
浪 乃 乃 鞋 乃 一 日 一 日 一 日 一 日
最 い 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日

童 東 枝 睡 童 東 川 枝 睡 童 東 川

ま 一 仲 人 と 志 と こ ぶ け 乃 一
色 種 乃 乃 ぬ る さ と 一
月 乃 乃 鞋 乃 一 日 一 日 一 日 一 日
身 乃 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日
一 日 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日
さ と 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日
持 乃 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日
凡 乃 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日
ぬ 乃 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日
靴 乃 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日
一 日 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日
海 乃 一 日 一 日 一 日 一 日 一 日

童 東 枝 睡 童 東 川 枝 睡 童 東 川

春花小鞠の口あゝぬえぬ 介

元禄四年卯月日

賀陽庶人北枝

二集

29
俳

刁塞

五老井記

許六選

霊泉ありし水の〜〜〜われり〜〜〜後ふりあま〜〜〜と〜〜〜と尺井
池より流るる〜〜〜湍湍の〜〜〜五老井と名づく列柱
あり〜〜〜五老井を流るる主人姓ハ東名ハ許六〜〜〜
五老井居士〜〜〜淵と五老とす別号也詠う原不志川流る
〜〜〜龍の山南ぶら〜〜〜十旬の休暇を〜〜〜半日此泉を領
〜〜〜遠小ま〜〜〜東江〜〜〜の錫を坂西〜〜〜の
あり〜〜〜霊泉をす〜〜〜以終の白ひを葎の中ふ〜〜〜
〜〜〜其水の清〜〜〜の惠山の泉脈を通〜〜〜あま
〜〜〜蕭列の金泉よひ〜〜〜と〜〜〜まけ終白藪の女を
〜〜〜と〜〜〜の生流をま〜〜〜か〜〜〜と〜〜〜

一しやのらふこゝろを敷くさうのハ其をまゝとて、
 井盤の納涼、上人の折乃注り、今ハ水小僧、
 廣大の、神仏の、其をすゝめ、具光の井と、
 水を奏らうと、伊氏、山あり、
 山あり、栗の、
 まりね、
 申酉の、
 あり、
 栗ハ、
 一、
 杜を、

箒とあて、
 穿てハ、
 小せ、
 芝、
 自然、
 の、
 ます、
 と、
 五光、
 樹林、

五光の流、
 樹林下、

元禄壬申冬

十月三日許六亭真行

し哉

うさうり人もよれ初時毎
 中ら仕付く心妻乃あし
 油を賣む小粒の吐味し
 汁入、黄くく川秋の凡く
 岩の月奥へ入けし古き
 先工丈とふ取屋の銘や
 女くさる清く中し憎まれて
 燈鮫〜〜心小妻あもみ流ス
 稼つむ笹の葉さよぬ〜〜と

許六 酒屋 代水 嵐南 筆 多 六

振礎をのほるなす乃入口
 半ふら寝ぬ人のうらまに
 花道のけく 蝟の喰飽き
 音響とあ〜〜の神の氣遷し
 水〜〜萩乃雨〜〜よ〜〜川
 八月ハ族面白さ小服紗
 横山〜〜乃〜〜茶〜〜け
 歩起さも富もむの本流〜〜
 ぼ〜〜も〜〜葉〜〜船乃卵〜〜
 名 妻ぬ〜〜く 隠者の當災〜〜や
 中〜〜厚の〜〜を 濁〜〜研〜〜
 さら〜〜と 船一本小〜〜書〜〜

堂 葉 水 翁 六 葉 翁 六 翁 六 堂 藪

新島とくく魚も持の上水
 灯乃新めつしき甲侍
 山ほとけの山をあるあり
 兎をハ新のまは焼ゆるでして
 尻月ふかふふ髪か産み女房
 いさやうれ急も志つへきくと雲
 琵琶を吹いて出る智物
 有酒を昆今門堂の小方丈
 舌れまろくぬ糞やいさ
 一とくしとさきさきのふとる系
 藤少く下る管板水の坂
 字長れうます白と守の流
 翁 水 葦 堂 六 翁

兼磨ふいなる百姓乃赤六
 花の古まろつへしある汁朱兼
 七十乃智のまら兼草立
 兼 堂

四 吟

李由

船舳や比えよと山とるうき
 昔の浦地は寝を神れしう
 酒道うはきく家賣手さるう
 京のそりや小樽酒ふささるう
 月々まき梅湯く流のぬれ白う
 一城くしとる白十花
 許六
 汶那
 徐寅
 六
 由

益るふ濱よの早稲をまふし
 女房の竹ふまのりいゝもく
 門より化粧まゝの宿の者
 向ふふ竹の月せの煮 血
 紫菀のちぢれちりしとある夏の書
 さん海いん丸のあまほ小鹽
 引き飯のまき君とらる男アを
 有く風いほほの出かんと
 大坂のあぢのやとき秋のまて
 月夜ふゆる奥の世の中
 一あゝ老樹のたれ家まて
 池と田草もろ小 嘘鳴たうら
 寅 卯 寅 六 寅 六 寅 六 寅 六 寅 六 寅 六

名
 永さ日れ十三結よまき
 熱く 群く 礼をいハく
 肥足よこびとの草袋のまき流とん
 也くもあれのほく ち橋
 傾媒のち中 咄一とい
 上のおぢの籠の接ふ朝明
 掃ちきる小庭の石をゆる
 くはあけく 墨温筆の丸
 物喰の先口もふほれ神と
 全いとの源をもらふかこつは
 とよくくと麻の風と夕月
 櫻子 授くむすし 横鼻碑
 寅 卯 寅 六 寅 六 寅 六 寅 六 寅 六 寅 六

う
 豊^フ 晴^ハ 清^ク 水^ノ 一^ツ 板^ヲ 持^テ ぐ 草^ノ 枯^レ 貞
 河^ノ 水^ハ 守^ル あく 任^レ 浪^ノ 海^ノ 底^ニ
 鱗^ノ 二^ツ 付^リ ち^き 鵜^ノ 啼^ッ づ^レ 丸^ク
 粉^乃 ま^す 子^ハ 此^ノ 結^ト ち^き ち^き ち^き
 け^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き
 首^も 志^業 業^も 浅^く 了^る 色
 貞 村 由 六 三 貞

三吟

野坡

秋^も ち^や 厚^く 切^り 折^ふ ち^き ち^き
 昔^も ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き
 昔^の 月^も 割^れ し^つ ち^き ち^き ち^き ち^き
 利^半 許^六

何^と も ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き
 大^智 の 中^に て 精^出 ち^き ち^き ち^き ち^き
 ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き
 華^れ ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き
 女^房 乃^ち 砂^は 一^ツ 吞^む ち^き ち^き
 飯^茶 八^つ ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き
 かい^善 の ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き
 用^分 の ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き
 玉^子 の 殻^は 多^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き
 何^も ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き
 日^母 高^人 の ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き
 浮^ぶ 靴^を ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き ち^き
 牛^六 坡^六 牛^六 坡^六 牛^六 坡^六 牛^六 坡^六

端山崎さうり 寺のせえと子
 ちんしんと息のぬれ落るる
 熱嫁進出と肌のさるる
名秋さきハカウしぬまやせハめきて
 家入前の三井一の松葉
 一あうのぬふ源一き枝の色
 女子とくまぶものさひひ
 煉掃のたきして急の歌と
 しゃう海と。町の奇合
 多流と場を通つて奥ふ
 どんむとくく食れ焦つく
 詠人のあついとくまは
 六坡 六坡 六坡 六坡 六坡 六坡 六坡 六坡

法界糸日くれりり
 表押の穂乃又しゆの月代
 碎の競ひふ麻を道やし
 根系越水のぬまきかり
 痺癢をうつるぬの緒災
 食隔小里やまむやの梅
 一年の習油喰込むを
 活生の終子の唱さるる
 六坡 六坡 六坡 六坡 六坡 六坡 六坡

三吟

本尊

唯をえくえる 鶴のさしはさ
 青の巨膚の 妙家組板
 むらうらうら 所々の草鞋漢やうして
 を歩、 袴を腰中、 小き
 言切く 斬とやまきて 此為持た
 寺場のとを 厂わくく。 也
 ひはとらと 曹洞宗此其ハ海て
 せり、 ねて 又 茶 研かとする
 む思ふらくく 下女ハ化粧かきさう
 泣物とて びふくくくくをむく

袖 六 袖 六 袖 六 袖 六 袖 六 袖 六 袖 六 袖 六

芥くく といふ茶を入く 茶漬喰
 片のあへ 昇て 上る。 ちる 也
 皺のふふ 琥珀乃珠敷のたふさよ
 菘も 動く ぬ 燈 燵の 有 咽
 砧う川 流はる 此いあきき
 漁村乃 並ふ 溪の 流 槽
 産草の 又門 徒 寺ふむらり
 弥生も 草くく 夜 忌 此 洗濯
 名 筒茶 首ふふ けく 草の 也
 又井 中くく ね 友 堂の 友
 又乙女 の子 持ハ 時ハ 腰 愈て
 菊ハ 皺く けく け 刻乃 草

袖 六 袖 六 袖 六 袖 六 袖 六 袖 六 袖 六 袖 六 袖 六

氏若子戸板の上の鬼糸
 まゝと鬻妻より秋の袖を
 御前より甲を脱ぐ月を
 矢口のさしにうへ玉川
 素粒のほろくさるる中
 柳半乃の紋のゆるぎ外
 糞近又無沙をゆるぎ流の石
 解毒の礼を孫ふいひよ
 冊抄珠のまうつらき交ぬ織
 本どらまどくそとぬ夷大黒
 正月の赤會ハ餅又梅りて
 佐和山ぬをり茶中ゆる

袖六 袖六 袖六 袖六 袖六 袖六 袖六 袖六 袖六 袖六

ままうらまの降つてく年
 六 袖

三 詮

波那

枯をふ収とまきれてるは月
 河系柳のまひとらふ
 お樸とるの命をまきと食とて
 るよりのうらひふよる縁の並
 かしこさに伯父の法まて丸め
 袈とるやうとらふあめの子
 八とくしうつえきも哀の一思案

許六 木導 村 六 村 六 村 六 村

伊勢路の去れ跡の元あき 六
 深村小まの掬取も一とやり 六
 能であらふ ころる 塚 下 六
 めつきりと揃く茶仕出来して 六
 むら子と嫂をあつゝえてやる 六
 さく波や大津ふよよる浪人荒 六
 又ほめくきて見えとるる 六
 夕涼くも増さしよ友の月 六
 掃除の法此十葉の臭さ 六
 傾珠の土葉ころあき湯芽原 六
 小傍々おふらと名のみ立 六
 食儘小莖大根を折曲て 六

孫不母るこしと洞はきあき 六
 尾小あるこ青ハ澄小洗ハ髪 六
 星とて氣深くさるる 宮 中 六
 東海の久世を越る鴨の夢 六
 又十色てもちなりぬ先 愈 六
 古雲を志ハくひくゆる舞の内 六
 妻いそとく一月の沈さる 六
 灯の影の果もちつく地蒸益 六
 白川石乃さきの家けさ 六
 むさうま名おれ法衣の所紹状 六
 本誓附乃乃新のそハつき 六
名
 のしと能く日此さくはハ虫果あく 六

昨 走 上 志 暮 支 那 の 糞 取 リ 六
 水 風 呂 志 暮 焼 くる 鶏 の 肉 辱
 去 乃 乃 蒸 の 味 を 志 暮 ぬ 辱
 本 町 北 垢 壘 の 末 ハ 志 暮 辱
 つ け 本 の 轆 東 風 送 也 六

三 吟

毛 統

読 者 宛 宛 崎 山 不 死 牡丹 米 密
 細 小 涼 一 暮 暮 の く 海 一 程 已
 福 引 乃 軍 法 一 暮 暮 一 小 夜 又 一

秋 毛 一 湯 豆 奪 此 月 六
 葉 の 毛 金 を 奪 一 奪 此 月 六
 種 毛 暮 の 風 一 奪 及 百 姓 六
 此 毛 一 後 夜 病 一 奪 以 一 暮 一 六
 武 士 一 暮 一 暮 一 奪 一 暮 一 奪 一 六
 毛 毛 暮 一 河 京 一 暮 一 奪 一 暮 一 奪 一 六
 一 毛 一 暮 一 暮 一 奪 一 暮 一 奪 一 六
 内 毛 一 暮 一 暮 一 奪 一 暮 一 奪 一 六
 五 年 一 暮 一 暮 一 奪 一 暮 一 奪 一 六
 毛 一 暮 一 暮 一 奪 一 暮 一 奪 一 六
 海 一 暮 一 暮 一 奪 一 暮 一 奪 一 六
 毛 一 暮 一 暮 一 奪 一 暮 一 奪 一 六

一本 穂ふ 湧りしる なり
 山こし けるふ 六尺をき 並ト
 戸板 平月の 穂を ころりま ぐ
 名 頃 風ふ ころり 吹上る 穂し して
 抽流 ころり ころり の 膝口
 ころり ころり ころり 日も ちたれ ころり
 只身 代ハ 志 木の 筒 畧
 傾 塚の 地 女も あり あり ねや
 縁 ころり ころり 暮も むを かに
 書み ころり 下 弦乃 月が ぬ ぬ
 松 茸 穂 ころり 穂 穂 の 山
 雲 入 乃 ころり ころり ころり ころり

即 非の 下 して 禪 ころり ころり
 深 ころり やつ れ 果 ころり 果 ころり 集
 暁 暁 暁 ころり ころり ころり ころり
 一 時 暁 暁 暁 暁 暁 暁 暁
 暁 暁 暁 暁 暁 暁 暁
 暁 暁 暁 暁 暁 暁 暁
 暁 暁 暁 暁 暁 暁 暁
 暁 暁 暁 暁 暁 暁 暁

六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六

何うくしと豆煮の布ふ湯見えて 六
 見費ちりり 立安奉 六
 祐等のよとぢひ世むたりぬぬ 六
 市若流をけく世なる静る 六
 氣鳴り折口の丁子祝ひ入 六
 棚し物の落とさるあり 六
 多風呂の中より見くさる月 六
 木の枝岸の流き草外 六
 碧油の二膏ふりくる 砂石草ふ 六
 田舎さき草の穂ぬとこハハ 六
 ぬえの踏ひ代工屋の音く 六
 ぞめいして通る 刺りくる方 六

竈の火も何のふふぬて葉の出くぬ 六
 分限えしけくぬ葉の列くぬ 六

七師三回忌 報恩

許六

月さふ淋し〜花〜紙子式 李由
 小妻の髪此まき〜しり 木尊
 草の麦苗のむら〜のまふたつ〜 朱猫
 お夜同志の市用さ〜やく 汶郵
 懐のふくれし〜れる 夏衣

馬佛
 糸岳
 胡布
 毛統
 程己
 徐寅
 六
 由
 導
 狹
 村
 俳

ましんがハ断と人小押
 ヲあくと烟をくく揚屋町
 松めつふ羽ふひく九也
 敷の子は折る牛産れ小室第
 去日鼻ある醫者の新宅
 人宿の飯ハやくと塔の塚
 介岸常ふ若き先へ登る
 高屋を祝てとふ家後ろ
 根太はうくお撲家
 林の里小村中こぞる喰ひ家
 いはう出てある。昔の月の
 息受で花見る人ハくやま

布
 己
 寅
 六
 由
 手
 抽
 邨
 佛
 岳

一 歩のくく果くり
 二 宮池くく佛の市洗濯
 若り昔くく細呂木の園
 飯橋のひくく流る川越て
 味峰焼門を和まぬり
 くくの棹小積く古遊
 るく敷きく菱堂を喰ふ
 いひくやと鏡の食屋又てけむ
 早麦あくくむ並松の月
 悪い夢女の伝くく友の月
 志堂の町の山のくり香
 流るふくくんと通る十弦物

本寺の材木にて成る藍塗橋 布
 ありし蓋大蓋戸の架の蓋 丸
 日まきありし物くきのひつづく 己
 けりし被の裾をはまきよす 眞
 門の外よりおむ六佛 六
 ざりしと車のきり花曇り 由
 する夜文のそとのまの境象 筆

辞世

月ハ様ふ鼻をき望也空佛

馬佛

三行アキ

悼馬佛

四号

六号
 ニアラス
 五号
 活字
 上下
 下
 上

茲の石子五月廿二日六成堂の馬佛例の寄書と
 ろくしし神ふ身まうしぬとまのまゝ山とまた吟席と
 女もししも仲た又高茶は即く伏せうにたの遊を
 ちりしこの終く一軸と送るはてはをゆる自病を
 と救ふもまゝありし亡師三回忌の遊を頼みの
 まく遠出とくはるは花又も人かうまもし
 りひもと向もりふむししにかうりぬ茶くすとき
 ものふの親をも手結し死良とあしこひま眼を
 利かふふのまうしれりしつふ鳥の飯を肥し
 うましし此報の片鏡をたしこれむり月あはれ

45 上
下

ふさぐ一人とあるも、ふ悔る悔の思深き一く
又あふとくまき名残を遺傳しく、形令のらまきり
と謝とあり

李由

于縁もさそれ子たの歌身源
時面てしものしなふもふく
及中一の味増ふこましくぬ縁にて
湯桶の酒ふたのあさふく
このぬさぬけと物と一とら
うとと^ツのまき秋の物
湖をゆふん流と果を町
西大名乃ニ^ツーらはく

鏡正
許六
朱袖
木導
程巳
波村
徐寅

鼻とそく^ツ喫くあれる紙の縁
灸の噴^ツかこひの縄
放系れ^ツ証まはまれと出のま

毛淋
羊出
瓶華

癸酉記行 关師友之錢別

許六離別詞

去年の秋、^ツりとりとめふ面をあらせこせし
五月に神^ツは切ふあをを切^ツむそとくぬふ
のそみく^ツ甲^ツひ^ツき^ツを^ツと^ツて^ツ終日
冥後と^ツあ^ツの^ツそ^ツ翁^ツ畫^ツを^ツぬ^ツ風^ツ雅^ツと^ツあ^ツえ
予^ツこ^ツら^ツみ^ツふ^ツこ^ツら^ツあり^ツ西^ツら^ツに^ツめ^ツお^ツお^ツお

凡の雅のなるぬいさるも、見雅と何の雅を
 かく画のなるをさして、さすまのいさ
 二つ一用をさすまのいさ、さありまのいさ
 君子とさあ徳を取るとれ、品好い、
 山々一用をさすまのいさ、さありまのいさ
 予、作し、凡の雅いと、予、さありまのいさ
 あり、これ、心、動、さ、精神、徹、小、入、
 善、徳、ありと、ぬい、其、函、を、あ、ふ、さ、予、
 さ、ふ、さ、あり、予、凡の雅、其、妙、を、窮、
 の、こ、こ、一、元、は、さ、さ、ひ、さ、さ、あり、
 さ、あり、あり、の、い、さ、あり、あり、あり、
 さ、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、

もありれあふ、さあり、さあり、さあり、さあり、
 給ひ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 志、も、無、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 と、や、これ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 細、い、一、節、を、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 さ、い、れ、れ、古、人、の、法、を、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 西、と、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 又、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 う、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

元禄六孟夏末

風流坊芭蕉述

おまゝくも月二日の夜旅し
はるはるふかき朝の露を
を使しつゝはの露もあきら
けくま一文さふみ若井
珠の落しつゝも
手紙ふりつゝも人
ふれつゝも
後々のれつゝも
あつゝも
あつゝも
むまれつゝも
お風子君餘別あり

其詞

本多の流をゆく旧里も
許六とまの古より川推
人ハははな後むも
破せよやあを
せめくおのま
今仕官おほやけの
たつゝも
歩けり若葉の
凡そひつゝも
おまゝくも

推のいせのふふし何とあまの流
 こせ
 うふ人の流ふもあまの流
 日
 五る二ふは交さるるきうへん
 ぬく今滅ほの形えよぬらふしぬ
 らく結。

餘別

笠野や菅の流し〜のやめ草
 枚凡
 東の流し〜流もさ〜た〜まら田火
 桃蔭
 本を流し〜り涼〜まら
 百甲

一行

本草の山流の流り〜と〜の八画家
 流河のあまけい〜と〜と〜

板のふまきと又うこつけ〜流のうね
 草氏 才波
 友のふあ〜の板さむが〜のま
 安氏 孟退
 ふる〜のま〜や流河の流
 甲斐のたす〜を教〜
 甲氏 美魚
 子の流と〜これあ甲斐の流を〜子付
 門氏 陳曲
 不二流の中〜ま〜〜
 林氏 隣郭
 此ふ〜の形えや〜
 松氏 日鮮
 美山の形〜と〜
 前氏 達化

元禄六
夏
四月

主人 翠堂の一日は
世の一日と画一相
詠 詠小 詠

未 未
源 源
あ ね

出 出
井 井

おののこ
あはれ
おののこ
あはれ
おののこ
あはれ
おののこ
あはれ
おののこ
あはれ
おののこ
あはれ
おののこ
あはれ
おののこ
あはれ
おののこ
あはれ

裁り扇の歌を
留る其
中よ
題

上下
ツル

二十子のり膝一點の流もまゝぬ六お上人
 独の上や、藤氏ハ列の逆旅を五不平の上
 の流流二古人ハ是三あるも地四あるも其五凡
 雅の境を一とて二一三古の境と速四とり
 流中一流のあり二たつ三る四二十五季六ある所ハ
 不被一流二え三う四海五月六は七報八を九あ十を十一士十二輩十三下十四の
 中一ふ二流三を四あ五い六る七う八め九く十い十一入十二り十三し十四て十五む十六む
 海一を二行三く四雅五求六の七者八ふ九ま十い十一ひ十二ふ十三る十四の
 海一流二を三い四入五り六已七は八六九度十を十一及十二り十三し十四た十五り十六ぬ十七る十八海
 市一山二は三奈四を五い六ら七る八今九は十十十一つ十二度十三や十四あ十五村十六山

甲路記行

四

六
行
ア
平

行一は二も三ま四り五ぬ六る七餘八お九の
 海一流二今三ま四り五る六畧七す

俳
不
け
行
行
行

郭をめぐりし石のきこえ多し
まのあこりふおぼしぬ
及も甲州の松林とほく上の
又もやまの川も流れゆく
支那の灯下もせうとせいの
名ふのわが戦場の由來を
けのなきふぬりしは
舟の舟をせうして松の上
あつしききききききき
心細きふはぬりしは
あつしききききききき
人のあつしきききききき

お月二日武江の鐘を退

卯のむしよせむしの馬は

甲のふしきききききき
あつしききききききき
おのくさあふまのあつし
あつしききききききき
あつしききききききき
あつしききききききき
あつしききききききき
あつしききききききき
あつしききききききき
あつしききききききき

風物々々 詠の賦 其小序

下り
三文字

流を尻尾のむ尻尾ハ道そのの裡為り
京流の尻尾ハハ夢流流の物也
翁白川の甲種翁と云ふ物也
翁の尻尾を去るは其れより輪の二んを
取く七百三十余程を以てと云ふ
翁の力を感じて一棒の物也
ふく凡流を去るは其れより輪の二んを
と取く画の物也
翁の尻尾を去るは其れより輪の二んを

上
下
ア

八
二
俳

流店のさ酒上取ま書依紙書
出のささ中煙ふやぐりけり門口の入湯
桶傾くは其れより輪の二んを
翁の尻尾を去るは其れより輪の二んを
取く画の物也
翁の尻尾を去るは其れより輪の二んを

一行アキ

せうほれやうくふ枝と傾きをよきこす特
入うれハるこくはまよま道を破るやう
ハセウとふくをくくはるは旅人も其まも
よく痛く一夜の御くふこめくはし
又久し

大名乃こ夜用もはゆるまこと
居つれの上をいしお取の物はこしと
しとまのちとてとまうまこと
ししし合一僕のたよまふとまま
鶴の鳴ぬおつれの男と起し枕枕を海で
飛をとりしとまのやうま入湯の一番
小入さふハ何の存とやははの枝葉ふ

あめこくくくくくくく
世作中との友よあまこは旅のやちと
しちのちけはしん
海風のまろおへ饅頭のあまもふ
抄汁の饅頭を喰ふはあま端玉のあ
あくくくまめをくくくくくくく
めまふ道をくくくくくくくくく
此のくくくくくくくくくくくく
おまは道はぬまはあまの旅くれ
行はくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく

あまあまよまは蜜柑やうはの山

舟川の上る智叟の情志ツレカとて
 一 見月の大あもりし備の形ふ半入
 まおのの艸のうへに流るれと首こせの
 信斎と細しと志しと丸白を徒すのハ
 将田念谷の賦也その海原を何み川
 とあてとてほり大まきある酒屋也天孫の
 中の流ハる人足とさふまよくとやまゆ人
 ハ殺しけりくそ有と音はりけりまら
 あうと志ハ負れたまふして舟塙のまき
 具なる様さうとていつと後ハ塙の情也
 了土かるを竜算ハ軒ふ日月とあうり
 一 盞の酒ふ流然の氣と名一とあふ一は

を流し頼とすとす極しくさむ女の芳を
 とあさむ異るの日まをのあらしも枝の
 木の下ふ眠て接の秋小ひる流の飲
 食をさるあふけり香汁しけり物と
 てるもの食と極しき不便のししと
 まうし吸しつらひもの裏まをさき後ハ身
 の穴ふ細め今とそんしとふむすあ
 一しせのる女もそとて世ふあ人のあ
 一ししつと月日とを世のあふと定めたる
 世をやらしとあらる人ふも何と
 出女も出りりり顔やののそむ
 流浪瀧泊の上ふとありれたるしし

ましおやき事 猪野まゆらちをわかき兼
日一西ふ二夜ハとめす ぬれぬれぬ
の夕暮小情ふさぎあるし〜も持良こ
なう〜しぬれ〜もおも焼あふあが
あ〜ハ二方きこと〜しりみお〜志う〜
つ〜〜志り〜ぬれと休じれ極めの
北場より逃おろされて却〜の〜ぬ
先より殺をすくぬぬ方ぬぬ小杖を
扱〜歩む〜し〜も人同病死
のふも〜耐もふも〜時 醫家療の
に〜け〜し〜し〜懐中の指針にやり〜
と〜病を防〜巡れぬ師の族ハ路改む

倒き外ス行目ある新着ふ道き〜れ
老僧の醫あ〜し〜入るれ〜し〜
形を治ふま泉の下おぬ〜して何ゆ
のあ〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜
れち中ふこめ〜し〜の影ひ衣敷の掃
む小れふある〜し〜し〜し〜し〜し〜
りあ〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜
堂のまよ〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜
隅田川のまよ〜し〜し〜し〜し〜し〜
ま〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜
以降の編を〜し〜し〜し〜し〜し〜
よみ〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜

二つを破つてさうさうな故里の海にさうさ
らうな老人也さうさうのさうさうさうさう
人の物さうさうさうさうさうさうさうの
さうさうのさうさうさうさうさう

于曾元禄九年丙子冬臘月日於

風狂堂選之

五老井主人

武林 奕羽官 許子六

孟耶觀主頭

月澤衛人 實年僧李由

風雅乃実哉山みよはゆくいまこ亡所は流むさよさん
 しきる魚孫のぬよりをうーなるてはや面この楊子死に
 との甲乙をいそぐはねをあうそわねの西像唇を重ん
 面交り交の事も目くくくく 流とさきまよと成り後行
 範くく 流をねとせむはる千あぬーむく 俳 浩 漢 書
 三十年よるをうーは乃優劣鞠多を教満乃流をさるー
 支子の瓶なうんわくくと款もまうーん後世の流をさるの
 流かうくく 流をくく 類を今を函底に埋きー古流のう流
 親の佳什と題のけりぬき丹好忠れをひ集ふらひ十二月を
 うる流は韻塞く歌をえん九西子を臘月賞年李由自序

三石

韻塞

李由選

十月

宿明照寺

元禄辛未十月廿
四十八歳

高寺は平田に地をうけりてより已に
百年とよふとてや清堂をたつて
曰竹對窓不たる老よりと涙みよ
おろしに村路にそとけり

芭蕉公

百年経きよきとて海乃花

御まゝにるる根香の葉

李由

一行上

八八 俳

賣

生ひふぬり世門此たらしとて
あらしこれ乃膏葉はるる
多し山と拾得とよふおらし
難水乃恵哉とてや海を揺
根の尾をつけしるる
掃とろと身此背中の葉

詠り

夜の中ふ本花を国やがる
炭燈や勝乃清あり鼻を
神堂月豆齋れしるあらし
一志きり園もありし神堂
元山や化をわらし神堂

老如え

本守

注六

毛紙

程已

加行

荊口

其角

松尾

朱由

素覧

魚中や 岩とく川て居る 海海魚
 麦糞乃 去よ 海つくー 九き式
 田島ある 字や 八百屋の 海取越
 有鼻の 海くー 八きり 海くー
 回月ふ山三井寺 此大根引
 糸物ふ付くしまりる や大根引
 刈株ふ一とー まー 一の 福
 木切ー 一ふはとー 一とー や 海 越
 風ふく 丸る 丸る 丸る 丸る 海 越
 木枝や 美子れ下を 通る 者
 去ー ー や 百姓 起く 出る 者
 系飛乃 去よ 見えぬ 枯野 此

如行
 李由
 汶村
 子那
 海六
 李由
 子珊
 正秀
 荊口
 美真
 馬佛
 智月

仕表来乃 廉も 俗さ 忍林の 海も
 新苦来此 海も 俗さ 忍林の 海も
 初海魚 百舌も 海の 使も 上川も
 昔の 海乃 海も 俗さ 忍林の 海も
 菊菊此 海も 俗さ 忍林の 海も
 流きー ー 海も 俗さ 忍林の 海も
 一五き 海も 俗さ 忍林の 海も
 海乃 忍を 海も 俗さ 忍林の 海も
 一收 海も 俗さ 忍林の 海も
 海も 俗さ 忍林の 海も
 海も 俗さ 忍林の 海も
 海も 俗さ 忍林の 海も

松風
 海六
 汎竹
 比餘
 猿雄
 水枝
 丈中
 米産
 牡羊
 利合

一行三行

亡作一箇よりよるはくし画像を
写しし神坂小幡と保門の什也
小幡神記

| | |
|-----------------|----|
| 誓美村赤松云云乃時此をくさくぬ | 洋六 |
| 妙用や友友老切誓美の事 | 翁 |
| 又事也の誓美中より此火壇式 | 毛織 |
| 山寺ハ山根くさよ火くさくぬ | 角上 |
| 小幡云云の誓美者こいまふ火壇式 | 李由 |
| 脇見くさく中くさくぬ | 徐寅 |
| 沙奈清や巖乃あをさ新次丘尼 | 洋六 |
| 此今海や波子のうへ力森しくな | 奥真 |
| けりくさく誓美中よりえいしと海 | 玄春 |

| | |
|------------------|---------|
| あまもも波あまももまもも | 李由 |
| ゆきくや 蝶をとりまきく鴨のあま | 洋六 |
| 海はたと取くさくぬ小鴨うま | 櫻己 |
| 河ヶ波ふす音らくく鴨のあま | 早 支梁 |
| 有る神記 | |
| 神事やなま小幡丹此がりくさ月 | 朱細 |
| 神事や一面の陣る勢田の橋 | 李由 |
| くさくや 獄をえ森のをこれ内 | 錢芷 |
| 神事や 細代の小幡れきる衛 | 汝村 |
| くさくや 拂ひもあしとあつり | 洋六 |
| 神事や ねまきくさくぬ中式 | 毛織 |
| 縄をくさく神事くさくぬしきん式 | 本守 |

お舟のりや 船板ま川岸のに 柳アを
 とももや 舟を 横しこのまゝさうり
 ふらけりくろく 押船ふまや 水ぬき

詩六
 李由
 木舟

二 看月

秋の夜や 七夜乃 船の 橋さうね
 柳の影も 夜に ぼくし 海や 雲乃 月を
 水は 澄み けの 影さる 志も よま
 柳は 影も ぬけ ぬ 雲 夜乃 那
 雲 畑や とも 影さる けの 後 茄子

菊口
 千川
 詩六
 改村
 干
 桐葉

色意 看月 二 看月 並具引

萱草のよよ おかえり 船の 日 和 成
 柳の影も 大 橋の 影さる 志も よま
 柳の影も ぬけ ぬ 雲 夜乃 那
 雲 畑や とも 影さる けの 後 茄子
 于 船の 影さる 志も よま
 舟 影乃 おかえり 船の 影さる 志も よま
 さハカク くる ぬき けの 後 茄子
 紙子 影乃 柳の 影さる 志も よま
 花 影乃 柳の 影さる 志も よま
 綿 帽の 影乃 柳の 影さる 志も よま

利牛
 漢山
 柳枝
 蓬聖
 木舟
 李由
 正秀
 後正
 燕下
 詩六

猿好

舟あそびくさやしくあつゝ森ぞんが
大怪しくて徳蓋みくらをあらはと
人と吐く息をかりしむを、猿
を、猿鞍の筒のふこてう輝
古猿子や猿子ふたうしくや籠
志川くさや二きやうれて京乃夜
六条の豆府の沙汰や、夜のを
と食のふりうしくも、水乃くも
おの口やえうしくも、取波女
こつらうの、スサは、あふや、猿のち

秋凡 李由 子那 本守 米彦 其角 李由 程己 波村

きんぎょの口と歌こして

晋子ぶのむらまのりる時

十口屋き海ひよるまゝ一若れ門
帆がしらよる海そくや凡 面
水鼻とやよるまゝ一若れ門
雲津、名乃志海りや、暮の、猿
川哉乃ぬく一若れ門
ちまがとの、まふまゝ一若れ門
おの、瓜のかくても、何の、世津、猿
あのを、乃大、猿や、まあ、一若れ門
妻の、乃、海を、まゝ一若れ門
は、まゝ、あふまゝ一若れ門
洞代、まゝ、海乃、まゝ一若れ門

洋六 泥足 李由 大中 毛紙 日鮮 白空 胡布 李由 許六

怪りしめく

早もそふふこの靴やまののりあ
 せぬあふこりぬまのや林まね
 吹風のちやや碎るこことしい
 昔のうへへしえとたり 鮎一鶴
 狼乃ちらまよるたりの月の月
 梅雪の相のまましやその月
 その月花を沈まのあしり
 枝のまねまふくつやそのま

大分
 知柳
 徐寅
 惟然
 許六
 実魚
 朱油
 木守
 浮六

極月

冬さ目々松やふむやたしこ切
 蕨白くほひひとていさむさ武
 あ服ふははゆを春のまふれまをさ武
 鮎はふさくら乃のまねまむさうね
 苦の麦粉乃松のまのうまはらま
 大幣の判かみぬふらまさうね
 元まつまてつんをふまて松まき
 鴨のうしらもまき ね系
 まきまのハハ松のまを神ハ松をト
 さくむさねハ松ハ松ハ松ハ松ハ松

千那
 翁
 毛純
 本守
 角上
 許六
 松爪
 没那
 支考
 尤次

拍賣のきふなりしはなまはら
 葉大根の古小喰はくさむさぶ
 ちりふたや二階の下は車・舟
 嫁入の門もささりけりあき
 細豆こぼれも志はくまき
 猫八の何れも身丸くささる
 猫八ふも悪徳を一日さす
 猫八や後を掃きハ細豆汁
 淨信や悟りてのささり喰
 善人よ又おささるくは菜
 ちりふたを引も。松乃嵐は
 傾城もいづく神はね念佛

風圃
 乙列
 探志
 許六
 翁
 本守
 汎竹
 海六
 芦年
 禪桃
 李由
 真真

長崎の市物も於一羊の市
 浪一揚や人のいふ。ぬり市
 毛糸のふもささるくは子
 長崎のいづくもささるくは
 雲うややぬりてのささる
 燗くもひ不動は似る眼
 ちりふたも鼻のささる佛
 燗杯ふ砂もささるくは
 すし揚や圃が喜ぶくは
 燗のふもささるくは
 ちりふたもささるくは

氷化
 真魚
 毛糸
 胡布
 父我
 卧高
 木草
 米岳
 嵐葉
 李由
 信水
 胡布

洞之くも 世もな 一のこころ
 追ふも 心も 海も 三才のくれ
 沙更く くり 心も たら くれのき
 殺引や 終り 破る 年れき
 本妙 雲門の たるや どのくれ
 日一人 又 又 一日の 水
 来も づ づ づ づ づ づ づ づ
 け 年や 心も 遠官乃 所 信人
 以 年 心 心 の 法や 死の 取
 勝 心 心 心 心 心 心 心 心
 録の 心 心 心 心 心 心 心 心
 心 心 心 心 心 心 心 心

曲翠
 文册
 子那
 馬佛
 百里
 仙化
 高川
 許六
 玄来
 本推
 本存
 を慕

示小坊主河段

所 心 心 心 心 心 心 心 心
 心 心 心 心 心 心 心 心
 心 心 心 心 心 心 心 心
 心 心 心 心 心 心 心 心

正月

七 程 心 心 心 心 心 心 心 心
 心 心 心 心 心 心 心 心
 心 心 心 心 心 心 心 心
 心 心 心 心 心 心 心 心

其角
 枕疎
 け筋
 許六

蜆子世登貝

白魚やまきと目毛ぬく法の網 家
桶神もほごれぬ梅乃盛火 谷水
ま町や白の合を乃梅の巻 李由
か〜風をうけ川なう〜川巻の家 本存

梅意

あり他のら〜と〜り園の梅 母坂
梅香やるのよ子〜海袋 朱袖
むめくやふの大作めあう月 波村
梅う〜や通〜と〜ら〜の巻 毛執
せ〜と〜ま〜濃花文乃ゆ梅乃 許六
と〜と〜法は〜むめ乃白ひ〜 本保並

か〜こ〜お〜腕〜り〜梅乃盛 角上
梅のひれ〜と〜と〜の梅 汎行

源川懐四

豆腐やむ〜の巻や梅の梅 許六
か〜と〜まぬをま〜の梅柳 家
せ〜の〜の籠の形や梅や梅乃 子那
実乃〜の巻を梅乃白乃腕〜 李由
た〜ら〜と〜梅乃梅本の巻の巻 徐寅
ま〜乃〜庚申場や梅乃内 許六
と〜食の巻を〜と〜梅 毛執
梅〜と〜と〜と〜と〜り 秋凡
梅〜乃〜巻〜巻〜と〜と〜と 子那

二月

二月乃あすの細ふ柳火

汶村

雪のふりもさし〜ぬり〜り哉
このひはあけまの雪も海なう
まろをやよぶ雪の上のひの鳥
下宿のさのさの雪をよまの
柳のあを折らせむとくまの
ゆ草のさへ〜り野を賣
傾珠のまもさ〜りの梅乃雪

湯子 妻考 毛紙 李由 汗六 甚角 本守

氷解ふつ〜ゆき〜ゆき
雪の入の空乃〜り〜り雪の上
や〜入や穀乃〜里乃〜れぬ
〜ゆき〜ゆき〜ゆきの今春
ゆき〜ゆき〜ゆきの春の雪
ゆき〜ゆき〜ゆきの春の雪
ゆき〜ゆき〜ゆきの春の雪
ゆき〜ゆき〜ゆきの春の雪
ゆき〜ゆき〜ゆきの春の雪
ゆき〜ゆき〜ゆきの春の雪
ゆき〜ゆき〜ゆきの春の雪
ゆき〜ゆき〜ゆきの春の雪
ゆき〜ゆき〜ゆきの春の雪

米森 木導 李由 汗六 菅口 吾仲 冒居 松風 尚白 本守 汗六 十川

梅うきさうこき柳の梢うね
凡の山さうりあき流の柳水
川よく流さうり柳うね
此節

大和巡遊の次古田の居りて

伐多きうさふきさうり川柳
徐寅

ままうさ枝乃さうりぬ柳水
如元

結さうり柳を結さうり柳水
李由

さうり人のさうりさうり柳水
許六

さうりかた人の別

二保さうりれ袖りの糸の角
翁

おのひまをさうり他さうり
于那

大勢や様の底れ結さうり声
李由

梅の子をのうきて蝶乃さうり水
丈那

梅端のさうりて迹れ於蝶乃水
如行

高き小矢橋を渡ふ於さうり水
本守

砂川やさうりなうりてさうり水
許六

早乃乃あをさうりさうり水
溪山

くろよおひさうりハサのさうり水
李由

陽をさうりさうりハサのさうり水
玄来

さうりさうり破風の瓦の如き宝珠
許六

さうりさうりさうりさうり風の葉
翁

さうりさうりさうりさうり風の葉
支考

さうりさうりさうりさうり風の葉
野坡

古伝おやさうりさうりの中れさうり風
子伝

歌金

交の息下ぬるもきくまの尻
 まさしくはやまのひりひり押や
 粟中の棚ると二日なると
 苗代を先あそぶくつゆの
 苗代やうきくく顔もななく
 百姓乃所沼敷なる蛙う那
 芦の葉れ達塵は似る蛙
 菜のむを身うらふはきくなく
 菜の葉や豆の粉食の豆りき
 菜のむや畑まのりの大草
 波繁像後ハ秋連乃立佛

許六
 千那
 毛執
 改村
 許六
 毛執
 本守
 本守
 許六
 毛執
 九次

三月

美野山又ちる方又を先とらり
 寄霞谷元政上人
 草乃戸のまもゆきやむのむ
 離るればはよよあそぶ花又
 又斗れ葉のあふは折るは
 羊くしよれいそくやむのむ
 日あそり乃花るる顔や輝き月
 むふいさそ折葉のまななり
 空塔をひとらり秋けんむ乃山

去来
 明聖寺
 李由
 許六
 孟退
 望翠
 野坡

遊又老井

香乃山出ふなうく井元ひと
白空

東嶽山吟の二

瘴とすれハ梅実まりゆ花又
日 其角
伐りを人の行へむやふさく
徐寅
狸乃海を 游北濁るや山様
毛執
大舟一此間小岬やふさく
本守
茶乃くさくさくはてぬや山様
洋六
ふさくふさく果一はてぬや山様
米島
まのぬを様ふぬてはせりり
翁

今れ君乃い庭一といやハ
李由
遊坂のうこまふれや妙さく
千那
霧の果や日々入るくやぬさく
汝村
梅さくやう流乃糞舩通ふ時
程己
實を採らふは地町乃地のを
朱袖
火ハ燃くあふ人なりの地花
嵐邊
宝岬の地小糞乃木こまうぬ
梨期
草餅よいに地花や鱈汁
土芳
足あふれや〜きもある波子火
一占
麻酔おの枝葉の生る志不ひ火
山店
松系は風を舞てて遊子火
凡園
山望や傘抱く夕なより見
洋六

紙層やわたりり流の物淋

出巻りりふぢりや蟹の結ひん

みまの着る新しき物や一季の春

出巻りり月丸乃り着る物

まくと蜻も伸きまの海

織法のあるしきさる日け水さ

水と日や大佛殿乃り着る物

草と出巻りりあしき物

旅り

まけて地まきとけくや本丸の巻

後波の河竹えんといひる時志り

り地乃り地地とさめく又後波の

ふも越むしりきれと

油まのりまふ取つてま本丸の花

結活乃りまふ亭りまのりまきり

いれ波草のさるりの文通り

うとれまや路のむくひれ物山

友のまきとさるやま橋の着ひ巻

ま凡呂乃りままおしきまのま

大和路のま乃りままをまきり

りまきや林巻りりまのりま

ゆくまきりり後や就ぬのりま

りまきりり飽りり飽のりり

千那

本尊

李由

本山

附と

汗六

李由

地正

殘香

汗六

李由

汎竹

汗六

虎竹

大ウ月

荊口

汗六

李由

四月

世の中とてうらみ無きやな
 ろ引して髪中人髪や更衣
 上ひく河原行く大工の衣
 いつとくは袷衣やうら
 似塔に喰はるるさあつせ
 凡の目ハ何ふらよふ社
 世長今寺
 筆の報を啼出せなく
 蜀魂門を胡桃乃義
 志考
 李由
 汗六
 其角
 程巳
 秋風
 志少
 本寺

草野て三井小海さうわ
 杜鰓鴨川の如山法師
 介文内まるとんは園や杜
 兄貴の顔又合まや蜀魂
 附るま一文字乃を如
 まもよまの松もぬまの杜
 大津よはゆるは勢甲
 くらひとす
 何しとを如四ハ纏の自
 鳥被賣れおまはる
 ま天又向ってひる九
 凱観心寺安丹
 千那
 李由
 毛孤
 玄来
 徐寅
 其角
 許六
 其
 汝那

楠の檜ぬう舞〜不〜ん〜ぬ
其角
之味縁のまふ〜り合ぬ牡丹
木守
蠟燭ふき川まひ〜る〜ん〜ぬ
許六

画賛

か〜柳子の血を于にはきて牡丹
葉由
芥子たきふ〜あ〜く〜他〜る〜ん〜ぬ
陳曲
幸老の〜つ月花格やま〜〜ん〜ぬ
波村

佐渡上野を〜む〜の路〜つ〜る〜芥子の
葉を〜る〜馬改初見茶葉花〜つ〜る乃
力を好〜る

態谷乃境あうれ〜ん〜ぬ
許六
花芥子や梅りはめ〜る〜あ〜〜ま〜る
木守

白川の岡あ〜る〜時竹田のま〜ん〜世
は〜く〜ら〜ひ〜る〜る〜お〜り〜ひ〜か〜く

卯のま〜と〜る〜〜〜園の遊〜ん〜ぬ
葉良
うの花のま〜ハ指ま〜〜〜箱の極
志芳
卯乃ま〜る〜漢あり〜る〜やぬ丸嵐
汎竹
横心や拵〜〜〜ぬ〜ら〜る〜の海彦
其角
仏法を禪〜〜〜〜る〜る〜臨
許六
傘ふ〜〜〜〜〜〜やかよ〜つ〜〜
木守
菖蒲や流の小〜〜〜〜可〜〜〜り
葉良
月あ〜〜〜や梅屋の〜〜〜乃杜〜
許六
う〜〜〜ふ〜〜〜〜〜食〜〜〜る
史邦
ま〜りや〜後乃ま〜〜〜〜れ夢〜い〜ら〜こ
波村

鼻渡のうねとよみ小深るるるのぬれ
首やかしきもくはくも 傘
竹の子に身をこころ猫のふりれ
筆の勢よちけり新める
花梅を枝に種ありすける
先竹
李由

小月

夕べからかゝり入る梅百六
小月ぬや蟹くつふまゝにけ
さゝらや焙炉よりきこぬれ臭
文章
翁
波村

布枕より梅の尻やを小月式 可吟

汗六のあましくぬくすてりぬる

福のふも江戸梅やまゝる雲 李由

仁和寺懐四

梅枝の香の盡れ序 室式 太ッ人 白里

競るるくもくハ陣乃影か 朱由

なま竹のまゝあして紙の不更 其角

むつりきとほのあやれや竹 胡布

たまはぬりのうらまはほろり

牛のあつ汗へ文のどくつまよ

ひるうがよきとあやうものゝ原の山 翁
豆粒の呆もくくくあやうてむ 汗六

本寺や、も、後、入る、と、う、ろ、う、て、ん
 公、義、堂、も、あ、り、精、つ、ら、ひ、や、川、た、り、
 般、路、の、火、目、の、無、不、畢、る、精、つ、ら、ひ、
 又、精、の、火、よ、ら、れ、ら、る、宗、乃、精、つ、
 伊、勢、義、や、精、乃、込、む、精、つ、ら、ひ、
 筑、持、く、精、乃、を、取、く、宗、乃、精、つ、
 大、名、の、列、々、と、精、つ、ら、ひ、大、井、川
 精、つ、ら、ひ、と、も、ろ、う、よ、今、や、宗、乃、精、つ、
 涼、丸、や、き、因、の、く、の、や、も、精、つ、
 幸、澤、や、世、間、な、く、む、田、植、り、
 精、つ、ら、ひ、と、念、仏、や、も、田、植、り、
 昔、昔、と、ハ、な、く、と、や、る、の、精、つ、ら、ひ、
 乙、州

蒸乃下後さ、と、早、苗、う、れ
 胡、布
 羽、亀、や、昨、日、植、り、
 田、の、深、さ、
 許、六

凡、呂、屋、より、重、子、兄、小、河、堂、り、
 本、寺
 秋、の、実、る、を、く、大、よ、なる、を、く、
 汲、井、
 苗、塚、を、休、む、重、子、や、飛、本、と、も、
 李、由

宗、乃、川、の、堂、を、昔、日、に、入、り、
 入、り、の、亡、魂、
 宗、乃、川、の、堂、を、昔、日、に、入、り、
 入、り、の、亡、魂、

か、と、さ、ら、
 合、銭、な、し、
 小、河、堂、
 許、六

六月

有難き時代はあやや古用干
肉張の勢乃異^サや古用干
許六 山吉 史事

八十小鳩を志征又子孫の業もく小

つきくくや九死くくくくくく干

くくくく

一竿ハ死装束や古用干

南てくくまハくくくくくく干

梅子乃 池と 落さくく麻地滴

田のまよさくくくくくく富士滴

友留さくくくくくくくくくく干

まの山石の血を換く隣くく

善待や 藪乃 びくくくのまれ家

ま白ふまを干まをまやまの山

照すけくくくくくく乃家くく

夕まよ 幾人 乳母のまやくく

白るふ一足くくくくくく産籠町

ゆりくくくくくくくくくくまを

相のまよまの埃のたままの異さく

大張や 砂乃 びくくくのあつさく

まよ元ま持の何つくくくの柳

川 鶴をくくくくくくくくくく

浮世の田舎よりふ道のまよく

李由

去来

多魚

様雖

洋六

け筋

李由

孤在

陳曲

如行

渡口

早の速も大くこ何とものつこ
程已

あまの速

棧やあまの速も如く棧のあま

あつこ山吹浦うけく文とくこ

中入や面をこくこくこくこ

乳母こもの食れ鳴や夕とくこ

はあこくこくこくこくこく

あれこれとほして町のあまこ

山体の勢もこくこくこくこ

津のうれあまこくこくこく

本力

程已

許六

孫

波村

毛洗

神坂

本寺

許六

本寺

本寺

四十八

あけの速も大くこ何とものつこ

涼しくも松の葉は乃破風造り

爪の速も動く清水北

雲近のうきうき付くこくこ

いそぐこくこくこくこく

あまの速も大くこ何とものつこ

羽衣や扇乃骨をうこくこ

かきこくこくこくこく

とく風や与市を招く女あ

涼風や涼も是を招くこく

本力

曹町

野明

許七

徐寅

許六

其用

全

許六

行記

七日

妻おき乃母七十あまうり七とこれ
秋七月七日よこしあふとて万葉
七種とりく歌のほろほろふつ
なる若七人は結縁ふふ身とて
あつて七更のよひななつて

七株の萩はよき本や星の秋
織女よむ乃茶あふ尾花が
布よ若くはなまをさうふ首のな
物よたりは中かきやとそ乃床
ろふ里れかきあふ茶や女郎花

翁
虎兼
沾徳
曾良
秋風

月代をさへふとてく多敷のくね
敷やり大や食あさしあふ西の家
世をいとしふ心のをく敷屋の舟

旅り

大垣をとおるまなうりぬまき赤丸
口の代を蠶をハせぬら風はくり
多を月やとらやとれとる舟日待
川流や登よりくも横田川

岩山中

登目る乃最とてなまうりもと

乙列
菅菰
後山
眠石
利合
泉魚
彫棠
翁

蘭のあふくちひはゆるん星乃まあ

其角

むくは日影を七きくちり

と海一ひきくちり

なまきくちり

ふあきくちり

九あきくちり

ふあきくちり

きくちり

絶てたきや星は一粒も乾かきん

素堂

み後のきまきくちり

汶村

かきくちり

許六

七夕やるきくちり

徳正

十一 五十

紗秋や帷子こくちり

毛純

あさうかのうくちり

許六

焼くそれ食の小かひや帷の風

李由

濃き帷子何をきくちり

程己

ゆきよまの糸をきくちり

光雪

さひくちり

汶村

糸乃丸の入日れ中や秋れき

毛純

うきは乃山き

十圍子も小粒ななりぬ秋の風

許六

同一の好田舎のきくちり

威をま

あそきくちり

同

追悼

吾叔の奥なほうしや親の秋
芋の葉よ風の吹りやまほり
そねくもの名を何くと鬼を
秋の藤一葉と花やまの
晴蛉のほつとぬけくさるる下

強清の巻

下帯のあつらふはる異心
初秋や萩の露れしお撲取
お撲取の後又ふり此の
投足又お筆お清をすまひ
襦袢又麻の白ひやとまひ

古来
徐寅
卓袋
大井
一桐
斜嵐

李由
米由
太由
朱由
洋六

後ろく家をのあふく猪お撲
傾城の行真くなるとり
食の湯の行おとるとり

福州巻

秋さひしきあまじきや瓜
しきと種をふくおとるとり
三日月やねふとつとる

翁
李由
後正

改村

水導

李由

八月

八雲の歌のうらむる時

許六

鷓鴣をよびててててててて乃月
其角

病床

折くくく月不度くやと日此月
馬佛

名月や奪くく小穂をかよ字く
于那

名月い若く若の花をて明小きり
李由

名月乃馬控めくくや葉大根
汗六

心ままててててててて月ん
徐子

十六夜とててててててて
翁

心よひや有るやあてあて人
汗六

十六夜乃氣をくくけくは
汝村

いとよひや望もくは神御海
毛靴

月奪くくくくくくくく
如元

松茸此生乃ひくまてて松く南
徐寅

雲草や團圞喜此中ふ桂てる
團友

松くけや大くおあのなくれき
吾仲

架屋此換新乃やくくや藁板
米岳

生をはく草のまこや好乃生
文香

くくくくくくくくくくくく
汗六

屋のまらるる風の中や虫乃あ
李由

虫乃喜や木綿西此くくく車
汝村

蝦豆を川くくくくくくく
為有

豆まらるる也くくくくく
支考

蟬乃まらるる梅海はせ葉れ
汝村

蛤蜊のすくことも又く香菰菴
菰刈れま田の端やふよ所

李由 許六

亡母年回退悼

同様の尼と侍をまじく神の家

栗由

たふしく伏妻お湯く

あうく葉摘る酒法乃人

許六

源氏の画賛をまねていまして

ゆきまねてひよのけ

傘持も月ふとくもさうさうぬ

其角

大さなふあふと好の中へうを

許六

石ふの石ふも書れうおりて

乙列

音ぬのやま芙蓉乃天丸火

翁

新帝やうのまをくわく精の末

毛洗

世乃中を造入うひてや艶の完

惟然

孟耶鯉乃夜活

夜くぬくおまき何れとと此山

去草

九月

逢ふゆはう入秋や氣乃花

木草

秋の穂くも肥しくり菊他を

李由

菊を秋にけし佛のあてう

千那

猫乃毛此湯くわりの藪のあ
 湯乃乃下新なり 藪此あ
 藪此あやあふふ藪彼の香ふあ

岱水
 其袖
 千川

加列山中のきき湯

山中のきき湯のきき湯の白
 湯のきき湯のきき湯のきき湯

湯
 湯

宿山寺

むく起やまよ此あああ
 湯のきき湯のきき湯のきき湯

本宿
 野重

本宿山寺

棧中今とくむきき湯のきき湯

湯

五老井 二百

又嘆れ海子と櫛乃 石ふふ
 あとやまよこもなれ秋の水

本草
 今

歌十三夜

月影やさしつゆのきき湯
 櫛のきき湯のきき湯のきき湯
 月代小吟と向よや櫛の櫛
 小男櫛やさしつゆのきき湯
 櫛のきき湯のきき湯のきき湯
 秋乃櫛をあまひあしけし
 あまひあしけし櫛の櫛
 櫛のきき湯のきき湯のきき湯

其角
 游刀
 本導
 許六
 梨期
 芦本
 李由
 水魚
 本草

又もこと語ありや小田乃厂

櫛も小啄をかろひや小田の厂

了乃仍くつさうや勢田の櫛

厩のひのむらひ合ふや志老望田

自画自賛 二句

白一や野鳥をさゆらば草のちか

落了乃おれかさかろる夜をさか

訪郷里旧友

病人と証ある夜をさか

客人の夜を押しはらるる夜をさか

遊五老井

榎栗の葉もも淋しけの山

李由

いゝ葉や落る合長は実く途

徒緬や先へまゝくわるるさうくと

于鱈の月へかへんる電もるる

破涼乃波小鳴入いとく那

訪厚志不遇

喰沙を抽味喰れ合乃いとく此

まるとまをアんと妙く抽味喰れ

妻地ある一くさうりや氏乃株

のゆくて妻よ小藪や秋の暮

謝芭翁被訪神菴悦而旧交

十年もいと暮一川と暮の秋

仍秋や身小引まゝ三布着る

支考

毛統

北枝

李由

許六

全

丈草

程已

李由

芭蕉

藤川

許六

惟慈

程已

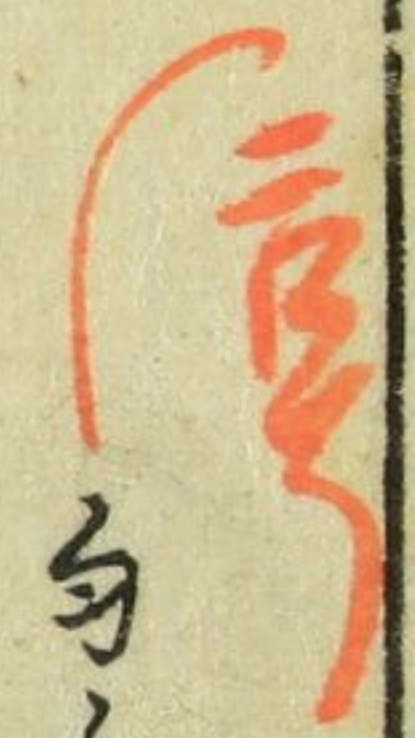
園友

渡村

許六

得施

翁



身ふふよ進加

閏月

芭蕉後の縁の鏡あふ

み月るも日と海のひと望月

さしこれふふと有ぬるき田式

夜配ごま月や作きのうささ

雛の来ぬ可ふ笑やまささ

と月も望みの別のをささうね

極月も望みありてはめと一筆且

味峰つふさうり七又日也さ乃ま

石巻

葛山

古立甫

如元

水魚

似替

大

晦月も望月始るお乃こう那

又月の二十日ねとらく灯籠式

小

陽妻や二十五日乃大晦日

新日ハ初あり終なり神如

日蝕

日蝕の目より喰入や粟乃虫

月蝕

疎翁のともくさるる月や月の蝕

月蝕のをささあさささ白牡丹

尚白

比竹

孟什

紫下

紫下

紫下

紫下

汶村

本守

彼岸

百燈の燈乃おしつひん

許六

きくくくくくくくくくくく

支考

きくくくくくくくくくくく

本守

古用

おん川うねり月此入の人

秋風

八專

改痛くは八專中や推の花

程已

十方くま

てりりりりりりりりりりり

毛紙

庚申

庚申や子や子や子や子や子

殘香

五十七

甲子

甲子やまうのや溝乃葉藤引

米倉

入梅

朋急れ夜裏を起そはいそ

錢芷

八十八夜

あくとつははははははははは

千那

二百十日

葉大根又二百十日の隣

李由

半反生

半反水や母と葉のまはる竹

許六

石作りの中又はたうり

朱袖

あま

門前の小家もあつたふり玉の
又

おのこ

あつたふり玉の
徐寅

寒く

月花乃思ふ針とさきさき乃入
翁

さきさき乃思ふ針とさきさき乃入
貞徳

節分

大豆はる川を中なる笑うれ
其角

まのたま

そ乃思ふ針とさきさき乃入
智月

立春

まのたまや 苗糸ふり玉の
神矢の根 祥六

跋

日本書紀ハ天理の曠也窮め源氏物語ハ人情乃實也蓋と
うや今韻ありてゆきとて二語ハ由許六乃揚なり
波郎そなく雅漢のやうなる者もあらずあつたふり玉の
水もさきさき乃思ふ針とさきさき乃入
竿よりのやうな者もあらずあつたふり玉の
牙を和らぎてせむやぬ屋よ彼屋を山東林に交まふ遠法
所語乃古車なる不濁乃む歌なり

蒲葺坊 僧千那書

孟耶觀主頭

月澤衛安

買年 李由

五老井主人

武林

赤羽官 許子六

韻害

刀奈義山引

歌中とも徳考ともつぬられむけせしハ表有十二日の
 之語こそれよいらんさむころりうとも嵐をに妹とも
 いとせは桃隣ふ袖もとも迎さるる村舎をさむいて
 入しよりはえこもさけ酒のりりとも本情もあしん
 ぬれしやも一袖ふぬく色意の昔を流ししひみ
 浪急の味い切居居へとんて深川をわくれは清澁川の
 塵芥のさ月を思ひ猿蓑の評は芝居の沙汰さうつり急さ
 一白ゆきこも替といしよよく傾治のころあまに事とせ
 て人多し人情さうめしれ物事のさあひ十人の酬和法
 九人うらら地をさあてしもたれく公孫一人を眼しにふし
 横行の鱗の逆元とあんで時のさうれよせんを味しおる

刀奈

孟耶觀主頭

月澤衛後

買年 李由

五光井主人

武林

森羽官 許子六

韻寒

刀奈美山引

歌中とも徳考ともつぬれむけせしハ表月十二日の
 之知こそれよいことなむむいりうもいりも嵐をに妹とも
 いとせに桃隣ふれんとも迎きに花柳舎をいりて
 入しよりいりていりて酒のりりとも本情をあらしん
 ぬれしともいりて一物ふれぬも是意をの昔をいりて
 浪浪の味いりて居るへいりて源川をいりて清澄川の
 塵をいりて月を思ひ猿蓑の評をいりて石の沙波よりいりて
 一りゆりていりて換といりていりて傾流のいりて事とせ
 ていりて人情をいりてこれ物事のいりて十人の酬和は
 九人うりて地をいりていりていりていりて一人をいりていりて
 換行の癖の迎究をいりていりていりていりていりていりて

刀奈美山

ハツ乃後年ひそくし〜〜〜神〜〜〜の志〜〜ぬき十ある
とを山崎の池をふと十程をたつて千あるひき
こをな〜〜〜む

千もた〜鴨川〜〜〜神ありき 其角

今サ〜〜年〜〜〜神〜〜 嵐雪

いざ〜〜人〜〜他〜〜〜神〜〜き 桃隣

旅人の池をふ〜〜〜〜〜 玄茶

これ望園の〜〜の北とと神跡を志〜〜して遊遊の十日の
相木のよ四子水野〜〜あ〜〜結と論蔵を志〜〜して回廊よ
うれ〜〜もれ風〜〜れ雪と〜〜〜〜〜羽織又志めりうは
るき〜〜梅ふ〜〜〜田楽の白ひ〜〜なりて一盞のす
むる桃隣、白き〜〜〜〜〜山を奉納の二るに十

面よ〜〜と耐〜〜〜〜馬をた〜〜して侍〜〜ひ〜〜とら〜
すの中ふ〜〜〜〜〜に縁掛不〜〜て家〜〜のふ〜〜を均〜〜あり
ひ〜〜〜芭蕉翁お越の隠居あり〜海の吟あり浪化忍び白
より佐作の〜〜お海〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
江戸の〜〜のふ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
事と法〜〜と〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
合〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
た〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
つ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
横葉の餘カ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
縮柳の麻を〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

となみ山の表

其角

ころ〜や神よのまを山のまね
 くるもこところよのまをふゆま
 来まを此國まことらん本具控く
 家ちころ〜のまをころひきり
 山鼻にまを人持く〜まを
 きさみかなまを又入るらんや
 蘇の花小刀ぬいて下〜どり
 そこれ氣の〜あさ
 有ゆ乃浮又幾を抄〜

浪化 嵐雪 排隣 去来 角 化 吾 隣

番羽織ま〜いま〜く〜ま

来

冬

け家う不破の心美登うま此中
 神も〜まを昔う京のめうけ共
 すり計や今ぬるやうにいつのま
 ろ〜すにまの風紋のまもな
 砂もや燈火よ女乃雀 疎
 ろ〜まをや所 身うけと角次中

炭翁 晋子 龜翁 女我 紫紅 專吟

春

やぬ入やひ〜の〜あ〜〜や筆

晋子

齒又つらぬきこもりも共花乃時
物陰や田隈れの存る種さり
彼岸ゆく彼岸様れちりより
まの野や木尻ハ葎の叢合せ
やぬ入や勝月おれ酒れ碎

岩云羽
尺中
彫棠
沾徳
事吟

夏

卯の花又草毛のるれ夜明る
よ乙女れよてせくまのよ川の支
鳥石乃るや牡丹れまのうけ
結さる火繩やりりり門さる
涼しきや帆の船のちりりみ

許六
彫棠
夕我
岩云羽
晋子

ト
三

清く舟行へり一はと伴へり

秋風

秋

星合や離別の中をさるひて人
霞を引板屋よりつる妻もこの夜
種のももこより合も解へ舟越山
寝とあれ煙の竜をさる月夜火
水に蛛一糸にらるくおうき寄
戸の後又さるるやみ乃上

山蜂
妹色女
紫紅
未階
晋子
同

元禄猪頭勇進之日

其角

去来文 演説しき

礪波山の探集よこあうこの
連気備されり也

曲翠

採獲の回を澤をそくさの香
 鷹とまうせんおろそくれこも
 松茸の敷を袖よりるせ合々
 著よちあうく一魚乃をち
 名月をこくうくよやな一
 湯浴乃盛あはさきさの妙
 ともあうも少し金を志ひらげ
 玄ル掌人のむを免 養う
 及故よもちぶつくとらん文の端

浪化
 正秀
 卧高
 胡故
 翠
 高
 秀
 翠

下四

時ぬのひらこのを本く
 さひ刀真加もあまのつとく
 戸を片陰よひらきと養所
 櫻桐のまよ風吹あつる月ようけ
 すまされ岸を下ル川舟
 とひ流のつとくこれれれれれ
 是腐よは昔のまの川とていなる
 今とやう庭とくを五ふ
 善のひよこれ殺まを
 陽をのちりくとしてあ
 とあうあうこれ鉄とてお
 障のされ鳥をさまのあくす

故
 秀
 高
 故
 翠
 秀
 高
 故
 翠
 高
 秀
 故

又窓又蓋してもうか何や
 下町の燈乃物と啼し去く
 越前虎の還ふか〜こき〜
 月をさへよぬりて通ふねのる
 深き屋の下みえうに〜秋の風
 沙青れを流を 意乃一葉
 判りし事あとい念佛まゝに
 五百れ錢をさ〜すま〜
 後指を今朝の難又並〜
 是形のぬる〜門〜
 紫積んとよか子丹をあ〜せて

翠 高 秀 翠 故 秀 高 故 高 翠 秀 高 翠

ト 五

きのおれ古き絲をゆ〜
 志ざら〜と花んの通ふ志
 幾士片側〜寺町乃春

高 秀 故

曲翠九
 浪化一 正秀九
 卧高九 故故八

此巻の解
名 三巻
九月十日
二アリ
樋口切

鳥と朔日とれや竹閣子
れ者うささくまの静さ
やぬ入のえやけ似合さくはて
又時の写よりうたうるを
火煙切ききもらうられ此方
ひりいさささ丸口平一の家
旅人小結ささうらう田舎道
このひこの臭きさ六月此末
下さるる細きいさひ引ちり
小倉並並ぬ蝶乃裏所
謂分乃ちらうと起る気さ
同 来 同 化 同 来 同 化 同 来 同 化 同 来

浪化

ト 六

梅咲るめくさるるやうと
年中とどねの内より料理さ
いせの勝日此いそくきさ
上舞の本舞合おさ傘さうて
湯を此も透ハハツさうりや
名月のをさささからあひ
つアてもなき梨まの切拍
お味唱の伝濃よけ家秋の風
ふはさ寺をせりゆお持さる
右の子此撫ひささひ又強さあり
まうけさるお彼乃文
は宿をささめい通る瓢の飯
同 化 同 来 同 芭 同 化 同 来 同 化 同 来

Handwritten notes on a small paper slip at the top of the right page.

鳥と朔日とんや竹閣子

浪化

乳者うきくまの静さ

やぬ入のえやけ似合さくはて

又附の習よまううたなるを

火煙切きまらうくはれは有

ひりいそまを丸に平一の家

旅人の縁をさうらう田舎道

このひこの臭きさ六月は来

ま下さる網をいこひ引ちり

小舎を並ぬ蝶乃裏所

謂分乃ちらうくと起る気な

去来

同

化

同

来

同

化

同

来

同

ト六

梅咲るめくまをくやうと

年中をどねの内より料理る

いせの勝日此いそくきま

上舞の本縁合およ傘さうて

湯を此も透ハハツさうりや

名月のをまやうまからあひ

つアてもなき和まの切拍

玉味唱の伝濃よけふ秋の風

ふはま寺をまげゆお持さる

右のふは権ひあふひ又強うあり

まうけしやるお役乃文

は宿をまめい通る瓢の飯

化

同

来

同

化

同

芭蕉

同

来

同

化

同

昔田う編りて夕立此くう
 平めなる石を敷くるは水場
 縁仕とせしめるまゝ食喰
 月とくまきやの垣柵を早とる
 ぬら天極をよけし 窮屈
 志のぬるを踊みとらとめし
 取くくうくうくうくうの傍
 系とくといつた望もゆりりり
 出と朝白の遠くよこす
 蒼みくくくく乃咲こゆき
 口み人通ふ傍長果なりり
 昔の河の子に此秘言在能

蕉 来 日 化 来 日 化 来 日 化 来 日 化 来 日 化 来 日 化 来

いつはしきふ志くさきとの中 来

浪化十五
 去来十五
 芭蕉六

こゝろにまのむ月か望み念は
旅無きたましく昔葉の白く目
を懐れ白空北枝をまよひま
こ此月此作言をわくす

即真

北枝

同沙を歌此年や林のこれ
まもあふ志のこつくいけ
田を返さるの蘇蓋はくらく
石つる百とやれうこく
白水は二番名おく月此歌
梧桐葉るを秋のるこめ
歩ぬる折るよハせのるうり

浪也
白空
林紅
牧童
筆
化

遠のこゝろ子にいうひ月をむく
借をうくもかの松をつけとる
袷はくもろくも旅しとら
うくくもし何もうも忘れたら
笑あつて海を途なうこれ
抱膝もめる内より夏の煙あり
あつひけあきうつふさおす
すうかきれはくも秋のま
夜ふもまけをわくも月
ちるまはあけの戸を叩く
歌よめく吟く無き流れ
さえくも兵具れつらあうけ

枝
紅
空
枝
童
化
空
枝
童
化
空
枝

めし〜〜〜に大に尾をぬる
 裏白のほくらけうつらひら
 四方多んかする草乃辻堂
 往昔れ宗祇の連流あゝはるし
 蒼ききそよりちもめうらもは
 あふしけふふめく人あて里より
 一荷のひげと鶺鴒れ ちりれ
 うそをききき海草前ふ店より
 げさハあゝふふやねろ墨石
 つら〜〜と目白の澄る月ふ〜
 藪のう〜ろをね〜〜きり
 妻刈のま同色せとぬる〜〜
 童 空 化 枝 童 化 童 化 童 化 童 化

ト 九

ひえ〜〜ふ菓子まを置よりけ
 上〜ツぬの〜く掌とらひらりめん
 船ゆる夜よれ〜〜ふす〜
 されハ〜〜と松ハ花より綴ふて
 海苔もて〜〜やれ 百日の〜
 枝 空 童 万子 紅

北枝 八
 浪化 八 白空 七
 林紅 三 牧童 八
 万子 一 筆 一

追悼のち句

去るは神や自らの辞世
終ふ事も越路のうりくまハ
や日教へて中えぬれ
義仲寺へは向杯おとさるの
侍つて晋子と終焉の記ふ
らさしつゝ人くあはれ

花さるハ難波のちめや都も
うめーとや海面に漂ふ墓の文字

句空
浪化

ト
十

去るは神や自らの辞世
終ふ事も越路のうりくまハ
や日教へて中えぬれ
義仲寺へは向杯おとさるの
侍つて晋子と終焉の記ふ
らさしつゝ人くあはれ

万子
煉坊
四膳
平交
宇白
共葉
壽仙
呂風
林紅
北枝

蕉雨の落葉舎小偶飛し流ひる

ころころつひまづらひる客こもの

情をむすひまゆりぬるそとの埃

人くまゆりりる序流小一巻よ

ころはらとてさすまらちとたり

とくしれまら

去來

曇らうらまをこけけけけけの思ふさ

お、まよふ蝶のたうささるるあう

歩荷持子振の人と呻しき

かこと石依の回ひまきう向

半時にけ、夜のうららるる月の入

穴乃こくくくと燐くやまむ

浪化

芭蕉

之道

夫艸

支考

朝口の草這のけるふしんあ

兄弟ともう兄弟あむむれ

切まうく富え涙を舟波やま

そろくしゆをまを乃ころりもの

奇合ハ録のとまぬさこころり

あうらまけしあんらうのさ

ちくころら風をまけてまら

こおらりしとそよくまを乃ま

砂川の流くなうらく夕月を

あうまれとも軽荷あうら

百巻小山苑の本陰の店屋もの

葉種纏よ海をこんくす

惟然

野童

野明

末

道

艸

考

然

童

明

道

末

此寺に楞嚴よりこのまゝ
 猫坊のま事此にいつううたふ
 朝のうらむとふにさおひせや
 饒つとあけく汁粉りり出
 とこ板のまゝ一回はあまほと
 僧上りつめくめうけたつぬ
 系小段よろ此十徳のまんり
 りぬさくはと秋のまふり
 け夕月をまゝよりひふり
 まつら富のなることく
 ぬきはく坪の島りれり
 甲ふ出まゝの市の小僧
 明 童 然 考 中 東 道 明 童 然 考 中

けられ化よのれまら
 むこと翼れなまら 換抄
 浄島の里下りしハ涙くみ
 めつことこよりおのこ入
 赤の香乃香くやまぬまら
 日うれ一日まれさえは
 明 然 蕉 中 考 道

- 玄来 四
- 浪化 一 芭蕉 二
- 之道 五 支考 五
- 失草 五 惟然 五
- 野童 四 野明 五

百舌もなほまよひ切早の入り
 うららかに暮乃とくくくあき
 本綿取庭もおとふさうりて
 世に又秋のちれうきさうき
 紫湯を中一覺うきく水の文
 村をいれぬきく小あ一軒
 ちほをまをふせやきもあつめく
 子深おろしうて同ふあうめく
 入らうくくぬるまあうき
 くとんのうきれんなりととる

其 浪 呂 林 夕 踏 化
 繼 化 音 健 非 紅 風

嵐書

十一 十三

金屋をたてしよせく秋の風
 月代えくく月の出うぬる
 ちうくくと如房を連をえく
 内まのんまよ北めしたうりる
 雪の餘のをともや鳴まー
 うらけ眠み谷のふ化寮
 秋れ葉乃たななハ高うて
 沖より風の吹まらりる
 いそよれも大石流の港
 音あいの陸を乾乾とさる
 湯つぎきとけちうたの道
 顔の上を動えうつれ白粉

風 紅 非 健 音 繼 化 風 健 音 繼 化

乙も借よを奉のよにあらして
 此の歌はハもくくくくく
 一面よき此ありは水たまり
 るれさいつり継家松明
 村切よ波の人足つめさせく
 内の一しめぬくは遊好流
 去んぬ乃半後かろと春の月
 藪よよなきと人らうれ難子
 本老をおこしとくくく花の雪
 きひ合羽乃はくくあめあり
 鯛干を焼ハ白ひの白髪よつき
 牛乳債の狼をい〜〜く

紅 化 青 健 風 継 化 紅 総 化 紅 青

空〜〜〜の路〜〜〜
 あ〜〜の〜〜〜
 風 兆

- 嵐青 六
- 其 總 六 浪 化 七
- 呂 風 五 林 紅 五
- 夕 非 三 路 健 四

賀刀奈美山撰集

風や釵を扱ふ砥流山 去來

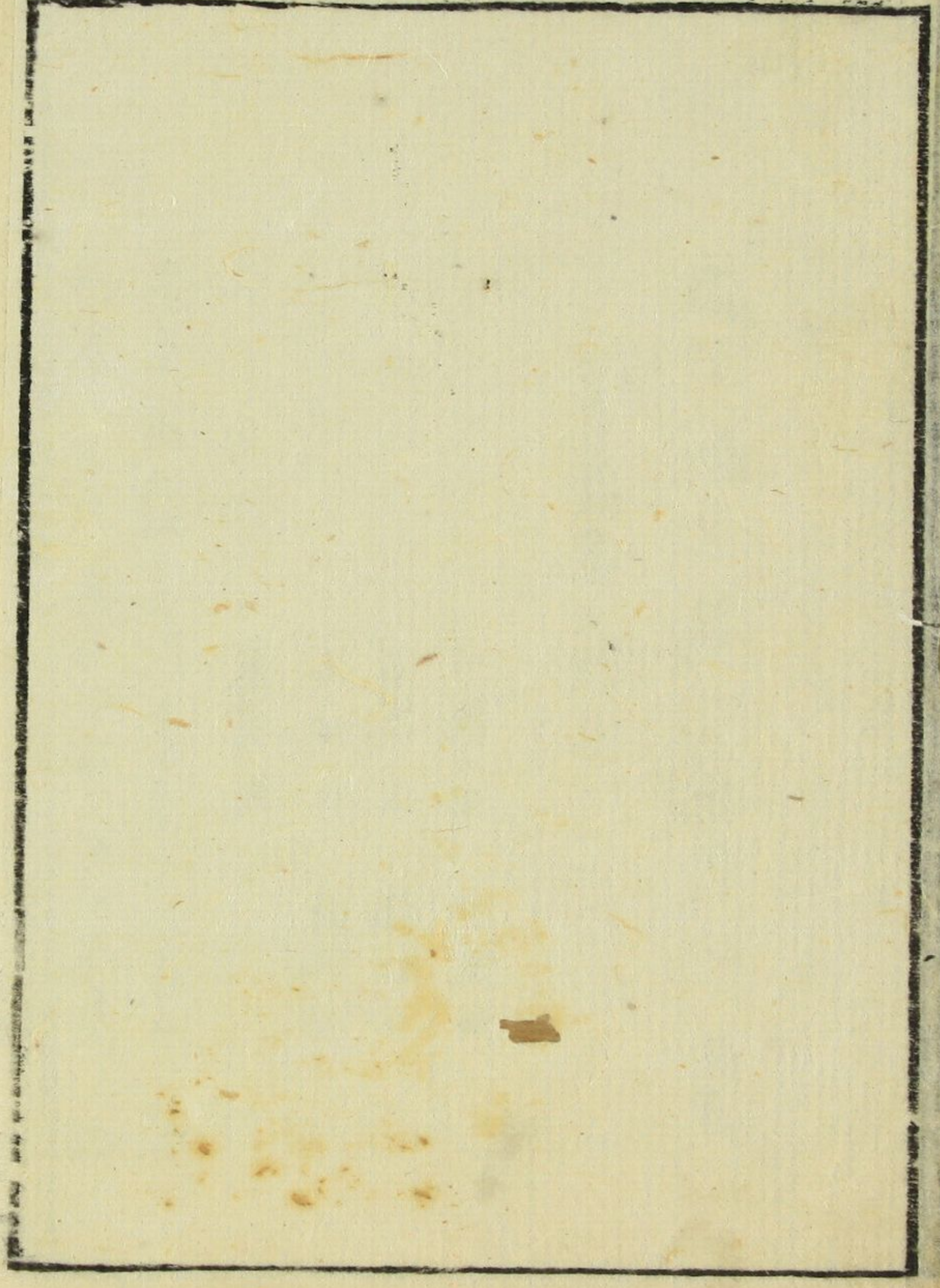
~~和~~ 日 22

し + 中

17

3

17



藤田和之郎
藏書